

TeX Live ガイド 2019

原版編集：Karl Berry

日本語版：朝倉卓人 *

<https://tug.org/texlive/>

2019 年 8 月

目次

1	イントロダクション	3
1.1	TeX Live と TeX コレクション	3
1.2	サポート OS	4
1.3	TeX Live のインストール (基本)	4
1.4	セキュリティについて	5
1.5	サポート情報	5
2	TeX Live の概要	6
2.1	TeX コレクション: TeX Live, proTeXt, MacTeX	7
2.2	TeX Live のトップレベルディレクトリ	7
2.3	いろいろな TEXMF ツリー (概要)	8
2.4	TeX の拡張エンジン	9
2.5	TeX Live に含まれるその他の著名なソフトウェア	10
3	TeX Live のインストール	11
3.1	インストーラの入手と起動	11
3.1.1	UNIX	12
3.1.2	macOS	12
3.1.3	Windows	13
3.1.4	Cygwin	13
3.1.5	テキストモード	13
3.1.6	GUI モード	14
3.1.7	その他のレガシーなモード	15

* <https://github.com/wtsnjp/texlive-ja>

3.2	インストーラの操作方法	16
3.2.1	バイナリ選択メニュー (UNIX のみ)	16
3.2.2	スキーム・コレクションの選択	16
3.2.3	インストール先ディレクトリ	17
3.2.4	オプション	18
3.3	install-tl のコマンドラインオプション	20
3.3.1	-repository オプション	21
3.4	インストール後のアクション	21
3.4.1	UNIX における環境変数の設定	21
3.4.2	環境変数をグローバルに設定する	22
3.4.3	DVD インストール後のインターネットを利用したアップデート	22
3.4.4	X _Y TeX と LuaTeX のためのシステム設定	23
3.4.5	ConTeXt Mark IV	23
3.4.6	ローカルおよび個人用のマクロを利用する	23
3.4.7	サードパーティフォントを利用する	24
3.5	インストールした T _E X Live をテストする	24
3.6	その他のダウンロード可能なソフトウェア	26
4	特殊なインストール	27
4.1	共有インストール	27
4.2	ポータブル (USB) インストール	28
5	tlmgr: T _E X Live マネージャ	28
5.1	tlmgr の GUI	28
5.2	コマンド使用例	29
6	Windows 向けの情報	32
6.1	Windows 専用の機能	32
6.2	Windows 向けに追加されているソフトウェア	32
6.3	ユーザプロフィールがホームディレクトリ扱い	33
6.4	レジストリ	33
6.5	パーミッション	34
6.6	Windows と Cygwin でメモリ上限を増やす方法	34
7	Web2C ユーザガイド	35
7.1	Kpathsea パス検索	36
7.1.1	パスの設定元	36
7.1.2	設定ファイル	37
7.1.3	パス展開	38
7.1.4	デフォルト展開	38
7.1.5	ブレース展開	38

1	イントロダクション	3
7.1.6	サブディレクトリ展開	39
7.1.7	特殊文字の一覧 (要約)	39
7.2	ファイル名データベース	39
7.2.1	ファイル名データベース	40
7.2.2	kpsewhich: パス検索用コマンドラインツール	40
7.2.3	使用例	41
7.2.4	デバッグアクション	43
7.3	ランタイムオプション	46
8	謝辞	46
9	更新履歴	48
9.1	過去	48
9.1.1	2003	49
9.1.2	2004	50
9.1.3	2005	52
9.1.4	2006-2007	53
9.1.5	2008	53
9.1.6	2009	54
9.1.7	2010	55
9.1.8	2011	56
9.1.9	2012	57
9.1.10	2013	57
9.1.11	2014	58
9.1.12	2015	59
9.1.13	2016	60
9.1.14	2017	61
9.1.15	2018	62
9.2	現在: 2019	63
9.3	未来	64

1 イントロダクション

1.1 T_EX Live と T_EX コレクション

このドキュメントは GNU/Linux やその他の UNIX システム, macOS, Windows 向けに T_EX 関連プログラムを集めたディストリビューション T_EX Live の概要について解説するものです。

この文書の読者は既にインターネット, T_EX Users Group の配布する T_EX コレクション DVD またはその他の方法を利用して T_EX Live を入手していることと思います。2.1 節は T_EX コレクション DVD の収録物について簡単に説明しています。T_EX Live と T_EX コレクションは T_EX Users Group (TUG) の協力によって維持されています。このドキュメントは主として T_EX Live それ自体を解説するものです。

T_EX Live には T_EX, L^AT_EX 2_ε, ConT_EXt, METAFONT, METAPOST, BibT_EX 実行プログラムはもちろん、T_EX を拡張する多数のマクロパッケージやフォント、そしてそれらの付属ドキュメントが含まれています。また、世界中で利用されるさまざまな言語における組版もサポートされています。

T_EX Live のバージョンごとの主な変更点については、このドキュメントの末尾にある 9 節 (p. 48) をご覧ください。

1.2 サポート OS

T_EX Live には GNU/Linux, macOS, Cygwin を含む、多くの UNIX ベースプラットフォーム向けのバイナリが含まれています。同梱されているソースを用いれば、デフォルトではサポートされていないプラットフォームでコンパイルを行うこともできます。

Windows については、Windows 7 以上のバージョンをサポートしています。いまのところ Windows Vista でも概ね動作すると思いますが、Windows XP よりも古いものについては T_EX Live のインストールすら成功しません。Windows については 64-bit 向けに個別の実行ファイルを用意していませんが、32-bit 実行ファイルは問題なく 64-bit 環境でも動作するはずです。

Windows および macOS に対する T_EX Live 以外のディストリビューションについては 2.1 節を参照してください。

1.3 T_EX Live のインストール (基本)

T_EX Live は DVD またはインターネットを利用してインストールすることができます (<https://tug.org/texlive/acquire.html>)。インターネット・インストーラ自体はとても小さなプログラムで、これを実行すると必要とされるすべてのファイルをインターネットからダウンロードします。

DVD インストーラはあなたのローカルディスクに T_EX Live をインストールします。T_EX コレクション DVD 上にある T_EX Live のデータ (またはその .iso イメージ) を直接実行することはできませんが、USB ディスクなどにポータブルインストールを行うことも可能です (4.2 節を参照)。インストールについては後ほど詳述しますが (p. 11)、ここでは「クイックスタート」として簡単に説明します：

- インストールスクリプトの名称は `install-tl` です。このプログラムに `-gui` オプションを与えると「GUI モード」(Windows と macOS でデフォルト)、`-no-gui` を与えると「テキストモード」(その他のプラットフォームでデフォルト) が実行されます。UNIX プラットフォームでは、Perl/Tk がインストールされていれば旧来の Perl/Tk と wizard モードを利用することもできます。Windows については 3.1.3 節も参照してください。
- T_EX Live をインストールすると「T_EX Live マネージャ」(`tlmgr`) も利用可能になります。インストーラと同様、このプログラムにも GUI モードとテキストモードがあります。T_EX Live マネージャを用いてパッケージのインストールやアンインストール、その他さまざまな設定タスクを実行することができます。

1.4 セキュリティについて

私たちの知る限り、 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ の主要なプログラムそれ自体はとても堅牢です（今までもずっとそうでした）。しかしながら、 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live に含まれる多数のサードパーティ製プログラムは、多くの人の尽力があるとはいえ、それでも同じレベルには達していないかもしれません。一般論ですが、信頼できない入力についてプログラムを実行する際は十分にお気を付けください。なるべく安全に実行するためには、新しいサブディレクトリを作って実行したり、`chroot` を利用したりしてください。

この注意は Windows については特に重要です。なぜなら Windows は、検索パスの設定に関わらず、常にカレントディレクトリにあるプログラムを他の何よりも優先して実行するからです。この挙動はさまざまな攻撃に悪用される恐れがあります。我々は多くのセキュリティホールを塞いできましたが、特にサードパーティ製プログラムについては、間違いなくまだ残っているものが数多くあるでしょう。したがって、カレントディレクトリにある疑わしいファイル（特にバイナリとスクリプトファイル）は事前にチェックしておくことを推奨します。悪意のあるファイルはそもそも存在するべきではありませんが、単にドキュメントを処理するだけで生成されることなどあってはなりません。

最後に、 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ （およびその周辺ツール）はドキュメントの処理中にファイル書き込みを行うことができますが、その機能もまたさまざまな方法で利用され得ます。再度の注意になりますが、ご自身で作成されたわけではないドキュメントは、必ず新しいサブディレクトリで実行するのが無難です。

1.5 サポート情報

$\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ コミュニティはアクティブかつ友好的で、ほとんどの真剣な質問には回答を得ることができます。しかしながら、こうしたサポートは非公式で、ボランティアや一般の $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ ユーザ有志によって行われているものですから、質問をする前にドキュメントや過去の Q&A をよく読んで、まずはご自分で解決できるよう最善を尽くしましょう（もし保証付きの有償サポートをご希望の場合は、 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live の採用は諦めて商用のシステムをご利用ください。<https://tug.org/interest.html#vendors> には $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ に関連する商用サービスを提供する団体の一覧があります）。

以下に $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 関連の情報源をリストアップしておきます。順番は概ねおすすめ順です：

はじめての方へ これからはじめて $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ をお使いになる場合は <https://tug.org/begin.html> にアクセスするとよいでしょう。 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ システムについて簡潔なイントロダクションを読むことができます。

$\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ FAQ $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ に関するよくある FAQ を集めた巨大なデータベースです。最も基礎的な質問からとても難解な質問まで含まれています。 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live では `texmf-dist/doc/generic/FAQ-en/` に含まれているほか、インターネット経由でも読むことができます (<https://texfaq.org/>)。 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ について質問がある場合は、まずここをチェックしてください。

$\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カタログ 特定の $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ パッケージやフォント、プログラム等を見つけない場合は $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カタログを探すとよいでしょう。これは $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 関連の成果物を集めた巨大なコレクションです。<https://ctan.org/pkg/catalogue/> にアクセスしてみてください。

ウェブ上の情報源 ウェブサイト <https://tug.org/interest.html> には多数の $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 関連リンクがまとめられています。特に $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ システムに関わるさまざまな話題についての多くの書籍、マニュアル、投稿記事を多数紹介しています。

サポート・アーカイブ L^AT_EX コミュニティ <https://latex.org/forum/> や Q&A サイト <https://tex.stackexchange.com>, Usenet ニュースグループ [news:comp.text.tex](https://news.comp.text.tex), メーリングリスト texhax@tug.org などは TeX コミュニティの擁する主なサポートフォーラムです。これらのアーカイブには過去数十年分の質問と回答が蓄積されています。特に後者 2 つのアーカイブは <https://groups.google.com/group/comp.text.tex/topics> と <https://tug.org/mail-archives/texhax> にて閲覧できます。また、より一般の検索エンジン (<https://google.com> など) ももちろん有用です。

質問する もし答えの見つからない質問にぶつかったときは、<https://latex.org/forum/> や <https://tex.stackexchange.com/>, Google グループ [comp.text.tex](https://groups.google.com/group/comp.text.tex) あるいはメーリングリスト texhax@tug.org に質問を投稿することもできます。ただし、どこで質問を投稿するにしても、必ず事前に「質問のしかた」(<https://texfaq.org/FAQ-askquestion>) を読むようにしましょう。このインストラクションに従うことで、有効な回答を得られる可能性を飛躍的に高めることができます。

TeX Live サポート もし TeX Live ディストリビューションに関してバグ報告や提案、コメントがある場合は TeX Live メーリングリスト tex-live@tug.org にメールを投稿してください。ただし TeX Live に含まれる個別のプログラムの使い方についての質問等は、TeX Live メーリングリストではなく、各プログラムのメンテナや専用のメーリングリストにご連絡ください。多くの場合、プログラムを `--help` オプション付きで実行するとバグ報告用のメールアドレスを確認することができます。

以上のリストは主に英語での情報提供・コミュニケーションを行う場所ですが、日本語でのサポートが必要な場合は、次のようなウェブサイトが利用できます：

TeX Wiki <https://texwiki.texjp.org/> は日本語で読めるものとしては TeX 関連情報を集めた最大の情報源です。現在は日本語 TeX 開発コミュニティ (texjporg) がサーバ管理を行っていますが、あくまで Wiki なので編集は誰でも行うことができ、掲載情報は必ずしも公式のものではありません。

TeX Forum <https://oku.edu.mie-u.ac.jp/tex/> は歴史の長い Q&A サイトで、現在も日本語で TeX に関連する質問ができる場所としては最もアクティブユーザが多く、熟練の TeX ユーザが多数参加しています。上記 TeX Wiki に日本語版の「質問のしかた」(<https://texwiki.texjp.org/?質問のしかた>) ページがありますので、初めて質問を投稿する際は必ず目を通すようにしましょう。

スタック・オーバーフロー <https://ja.stackoverflow.com/> は TeX に限らずあらゆる技術・プログラミング関連の質問を投稿することができる Q&A サイト Stack Overflow の日本語版です。最近はこの L^AT_EX タグ (<https://ja.stackoverflow.com/questions/tagged/latex>) にも少しずつ TeX/L^AT_EX 関連の質問が投稿されるようになってきています。

TeX ユーザは上記のような場所でサポートを受けることができる一方で、あなた自身が他の質問者の手助けをすることも可能です。いずれのコミュニティも全世界に開かれたものですから、ぜひお気軽に参加・購読し、ヘルプが必要なユーザを助けてあげましょう。

2 TeX Live の概要

このセクションでは TeX Live と TeX コレクションの収録物について紹介します。

2.1 T_EX コレクション: T_EX Live, proT_EXt, MacT_EX

T_EX コレクション DVD には以下のものが含まれています:

T_EX Live ディスクにインストールするための完全な T_EX システム (ディストリビューション) です. ウェブサイト: <https://tug.org/texlive/>

MacT_EX macOS 向けの T_EX ディストリビューションで, 専用のインストーラといくつかの Mac 用アプリケーションを T_EX Live に追加しています. ウェブサイト: <https://tug.org/mactex/>

proT_EXt MiK_T_EX ディストリビューションの Windows 向け拡張です. proT_EXt は MiK_T_EX にいくつかのツールを追加しているほかインストール手順を簡略化しています. これは完全に T_EX Live とは独立で, 独自のインストールガイドがあります. ウェブサイト: <https://tug.org/protext/>

CTAN CTAN リポジトリ (<https://ctan.org/>) のスナップショットです.

CTAN および protext は T_EX Live と同じライセンスで配布されているわけではないので, 再配布や変更を行う場合は十分にご注意ください.

2.2 T_EX Live のトップレベルディレクトリ

ここに T_EX Live ディストリビューションのトップレベル (最上位階層) にあるディレクトリの一覧を示し, それぞれについて簡単に説明しておきます.

bin T_EX 関連プログラムを格納しています. 実行バイナリはプラットフォームによって異なります.

readme-*.dir T_EX Live の概要と有用なリンクを集めた多言語の README を含んでいます. HTML バージョンとテキストバージョンがあります.

source T_EX Live に含まれるすべてのプログラムのソースコードです. Web2C で記述された, T_EX ディストリビューションのコアプログラムのソースコードも含まれています.

texmf-dist 最も重要な TEXMF ツリーです. 詳しくは下にある TEXMFDIST の項目を参照してください.

tlpkg インストールに必要なスクリプトや Windows 向けの補助プログラムを含んでいます.

ドキュメントを探す際には, 同じくトップレベルにある doc.html が役立ちます. このファイルには texmf-dist/doc 以下に含まれるほとんどすべてのドキュメント (パッケージ, フォーマット, フォント, プログラムのマニュアルや man ページなど) が掲載されています. また T_EX Live に含まれるドキュメントを検索するには texdoc コマンドを利用することもできます.

この T_EX Live ガイド自体は texmf-dist/doc/texlive 以下にあり, 多数の言語に翻訳されています:

- チェコ・スロバキア語: texmf-dist/doc/texlive/texlive-cz
- ドイツ語 texmf-dist/doc/texlive/texlive-de
- 英語: texmf-dist/doc/texlive/texlive-en
- フランス語: texmf-dist/doc/texlive/texlive-fr
- イタリア語: texmf-dist/doc/texlive/texlive-it
- ポーランド語: texmf-dist/doc/texlive/texlive-pl
- ロシア語: texmf-dist/doc/texlive/texlive-ru

- セルビア語: `texmf-dist/doc/texlive/texlive-sr`
- 簡体字中国語: `texmf-dist/doc/texlive/texlive-zh-cn`

2.3 いろいろな TEXMF ツリー (概要)

この節では、システムに利用される種々の TEXMF ツリーを指定するために予め定義されている変数を一覧にし、それらの所期の目的および T_EX Live でのデフォルト構成を説明します。コマンド `tlmgr conf` を実行するとこれらの変数の値が表示されるので、各 TEXMF ツリーがあなたのコンピュータで実際にどのディレクトリを指し示すのか容易に確認することができます。

個人用のものも含め、すべての TEXMF ツリーはその大量のサブディレクトリとともに T_EX ディレクトリ構成 (TDS, <https://tug.org/tds>) にしたがうべきです。TDS にしたがわない構成の場合、ファイルが見つからない可能性があります。詳細については 3.4.6 節 (p. 23) を参照してください。ここで列挙するのはツリーが検索される順序の逆順です。つまり、より後に登場するツリーによって、それより前のツリーの内容は上書きされます。

TEXMFDIST このツリーには T_EX Live ディストリビューション自体に含まれるほとんどのファイル (設定ファイル、スクリプト、パッケージ、フォント、etc.) が配置されています。(主な例外はプラットフォーム毎の実行バイナリで、それらはトップレベルの `bin` ディレクトリに配置されています。)

TEXMFSYSVAR この (システム用の) ツリーは `texconfig-sys`, `updmap-sys`, `fmtutil-sys`, `tlmgr` などが、フォーマットや生成された `map` ファイルなどの実行時 (キャッシュ) データを保存するためのものです。

TEXMFSYSCONFIG この (システム用の) ツリーは `texconfig-sys`, `updmap-sys`, `fmtutil-sys` などが、変更された設定データを保存するために利用するものです。

TEXMFLOCAL このツリーは、システム管理者が全ユーザに適用するためにマクロやフォントなどを追加または更新して配置するためのものです。

TEXMFHOME このツリーは、一般のユーザが独自に追加または更新したいマクロやフォントを配置するためのものです。この変数の展開結果は、使用するユーザに合わせて動的に変化します。

TEXMFVAR この (ユーザ向けの) ツリーは `texconfig`, `updmap-user`, `fmtutil-user` などがフォーマットや生成された `map` ファイルなどの実行時 (キャッシュ) データを保存するためのものです。

TEXMFCONFIG この (ユーザ向けの) ツリーは `texconfig`, `updmap-user`, `fmtutil-user` などが変更された設定データを保存するために利用するものです。

TEXMFCACHE このツリーは ConT_EXt MkIV および LuaL^AT_EX が実行時 (キャッシュ) データを保存するためのものです。デフォルトでは TEXMFSYSVAR (またはこれが書き込み不能な場合は TEXMFVAR) に設定されています。

デフォルトの T_EX Live 構成:

システム用ルート 複数の T_EX Live を配置できます (デフォルト値は UNIX では `/usr/local/texlive`)

2018 前年のリリース

2019 最新のリリース

`bin`


```

i386-linux  GNU/Linux 向けバイナリ (32-bit)
:
x86_64-darwin  macOS 向けバイナリ
x86_64-linux  GNU/Linux 向けバイナリ (64-bit)
win32  Windows 向けバイナリ
texmf-dist  TEXMFDIST, TEXMFMAIN
texmf-var  TEXMFSYSVAR, TEXMFCACHE
texmf-config  TEXMFSYSCONFIG
texmf-local  TEXMFLOCAL (リリースに依存しません)
ユーザのホームディレクトリ ($HOME または %USERPROFILE%)
.texlive2018  前年リリースに適用するユーザごとのデータ (設定や生成物)
.texlive2019  最新リリースに適用するユーザごとのデータ (設定や生成物)
texmf-var  TEXMFVAR, TEXMFCACHE
texmf-config  TEXMFCONFIG
texmf  TEXMFHOME (ユーザごとのマクロなどを配置)

```

2.4 T_EX の拡張エンジン

Knuth によるオリジナルの T_EX は既に開発が終了しており、ごく稀にバグ修正が入る程度です。T_EX Live には現在もこのオリジナル処理系が `tex` として含まれており、この状況は当面の間は変わることはないでしょう。一方で、T_EX Live にはいくつかの T_EX を拡張したエンジン（それらも T_EX 処理系と呼ばれています）も収録されています：

ε-T_EX この処理系ではいくつかの追加プリミティブ（主としてマクロ展開、文字列スキャン、`\marks` クラス、デバッグに関わるもの）と双方向組版のための T_EX- \XET 拡張が利用可能です。デフォルトモードでは、ε-T_EX はオリジナルの T_EX と完全な互換性があります。詳細については `texmf-dist/doc/etex/base/etex_man.pdf` を参照してください。

pdfT_EX この処理系には、ε-T_EX の機能に加えて DVI 同様に PDF を出力する機能と、その他出力とは関係のない多数の追加機能が搭載されています。この処理系は、`etex`、`latex`、`pdflatex` など多くのフォーマット（コマンド）から呼び出されています。pdfT_EX のウェブサイトは <https://tug.org/applications/pdftex/> です。T_EX Live にはマニュアル (`texmf-dist/doc/pdftex/manual/pdftex-a.pdf`) と pdfT_EX の拡張機能の利用例を示した文書 (`texmf-dist/doc/pdftex/samplepdftex/samplepdf.tex`) も収録されています。

LuaT_EX pdfT_EX の後継として開発されているもので（完全ではありませんが）概ね後方互換性があります。また Aleph の上位互換となることも目標になっていますが、これについても完全な互換性があるわけではありません。この T_EX エンジンには軽量スクリプト言語 Lua (<https://www.lua.org/>) のインタプリタが組み込まれており、T_EX における厄介な問題に対処するのにとても役立ちます。texlua として呼び出した場合は独立の Lua 処理系のように振る舞います。そのため T_EX Live に含まれる一部のプログラムもこの Lua 処理系によって実行されています。ウェブサイト：<https://luatex.org/>、マニュアル：`texmf-dist/doc/luatex/base/luatex.pdf`。

$\mathrm{X}_{\mathrm{E}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Unicode による入力と OpenType フォントおよびシステムフォントの利用を、サードパーティ製のライブラリを利用してサポートする $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 処理系です。ウェブサイト：<https://tug.org/xetex>。

Ω (Omega) Unicode (16-bit 文字) ベースの処理系で、すなわち世界中のほとんどあらゆる言語で用いられる文字に対応しています。この処理系はいわゆる ‘Omega Translation Processes’ (OTPs) もサポートしており、任意の入力について複雑な組版処理を施すことも可能です。

\aleph (Aleph) Omega と $\varepsilon\text{-}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ を組み合わせた処理系です。詳細については `texmf-dist/doc/aleph/base` を参照してください。

上記の $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 処理系は主として欧文組版を行うために開発されたもので、そのままでは日本語の組版には適しません。幸い $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live には日本語組版を行うために拡張されたエンジンもいくつか収録されています：

$\mathrm{pT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Knuth によるオリジナルの $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 処理系を日本語組版用に拡張したものです。和文フォントを扱うことができるように拡張されているほか、禁則処理や縦組みにも対応しています。詳細については `texmf-dist/doc/ptex/ptex-manual/ptex-manual.pdf` を参照してください。

$\mathrm{upT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ $\mathrm{pT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ の派生エンジンで、内部コードが Unicode に変更されています。基本的には $\mathrm{upT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ は $\mathrm{pT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ の上位互換となっており、UTF-8 入力が活用できるのみならず、他にもいくつかの機能が追加されています。

$\varepsilon\text{-}\mathrm{pT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$, $\varepsilon\text{-}\mathrm{upT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ $\mathrm{pT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ と $\mathrm{upT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ に $\varepsilon\text{-}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 相当の拡張機能を追加したエンジンです。現在 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live に含まれる `platex`, `uplatex` コマンドではデフォルトでこれらの処理系が呼び出されます。最近では `pdfT_{\mathrm{E}}\mathrm{X}` 由来の機能も一部利用できます。詳細は `texmf-dist/doc/ptex/ptex-base/eptexdoc.pdf` をご覧ください。

また `LuaT_{\mathrm{E}}\mathrm{X}-ja` というマクロパッケージを用いると `LuaT_{\mathrm{E}}\mathrm{X}` でも日本語組版を実現できます。詳しくはウェブサイト <https://ja.osdn.net/projects/luatex-ja/> またはドキュメント `texmf-dist/doc/luatex/luatexja/luatexja-ja.pdf` を参照してください。

2.5 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live に含まれるその他の著名なソフトウェア

ここに少しですが、 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live に含まれていて、よく利用されるプログラムを列挙しておきます：

`bibtex`, `biber` 参考文献リストの作成を補助するプログラム。

`pbibtex`, `upbibtex` `bibtex` を日本語用に拡張したもの。

`makeindex`, `xindy` 索引の作成を補助するプログラム。

`mendex`, `upmendex` `makeindex` を日本語用に拡張したもの。

`dvips` DVI を PostScript に変換するプログラム。

`xdvi` X Windows システム向けの DVI ビューア。

`dviconcat`, `dviselect` DVI のページを切り貼りするためのプログラム。

`dvipdfmx` DVI を PDF に変換するプログラム。

`psselect`, `psnup`, ... PostScript ユーティリティ。

`pdfjam`, `pdfjoin`, ... PDF ユーティリティ。

`context`, `mtxrun` `ConT_{\mathrm{E}}\mathrm{X}t` と PDF プロセッサ。

`htlatex`, ... `tex4ht` は $(\mathcal{L})\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ を HTML や XML に変換するプログラム。

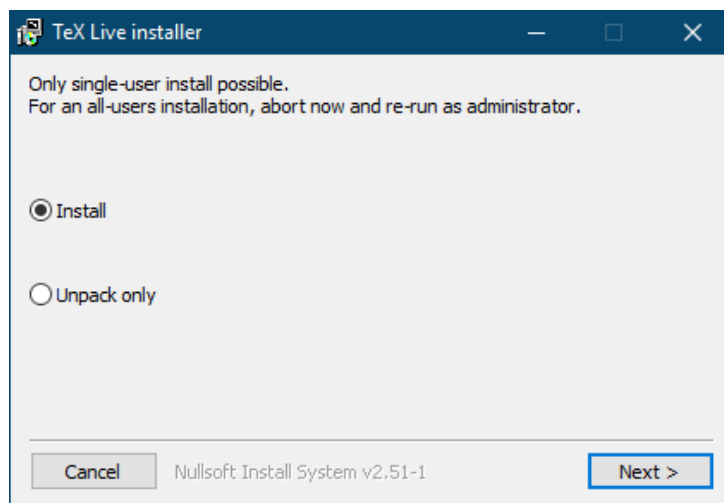


図 1 Windows 用インストーラ (.exe) の初期画面。

3 TeX Live のインストール

3.1 インストーラの入手と起動

TeX Live をインストールするためには、まず TeX コレクション DVD を入手するか TeX Live のインターネット・インストーラをダウンロードします。より詳細な情報や TeX Live を入手するその他の方法については <https://tug.org/texlive/acquire.html> を参照してください。

インターネット・インストーラ (.zip または .tar.gz) CTAN の `systems/texlive/tlnet` 配下からダウンロードできます。 <http://mirror.ctan.org/systems/texlive/tlnet> にアクセスすると、最寄りの最新ミラーにリダイレクトされるはずです。 `install-tl.zip` (UNIX および Windows 向け)、またはそれよりもかなりファイルサイズの小さい `install-unx.tar.gz` (UNIX 専用) の好きな方をダウンロードしてください。ダウンロードしたアーカイブを展開すると `install-tl` サブディレクトリ以下に `install-tl` および `install-tl-windows.bat` が見つかるはずです。

インターネット・インストーラ (Windows 用 .exe) 上と同様に CTAN からダウンロードし、ダブルクリックしてください。すると、インストーラの最初の画面 (図 1) が表示されるはずです。この画面では「インストール」または「展開のみ」のいずれかを選ぶことができます。

TeX コレクション DVD DVD 内の `texlive` サブディレクトリを開いてください。Windows では、通常 DVD を挿入するとインストーラが自動的に起動するはずです。TeX Users Group (TUG) の会員になるか (<https://tug.org/usergroups.html>), TUG のオンラインストア (<https://tug.org/store>) で個別に購入すると DVD を手に入れることができます。また、配布されている ISO イメージからご自身で DVD に焼くことも可能です。DVD または ISO から TeX Live をインストールした後、インターネットを利用して継続的にアップデートを行いたい場合は 3.4.3 節をご覧ください。

いずれの手段でインストーラを入手しても、まったく同じプログラムが起動します。入手方法の違いによって生じる差異のうち、ユーザにとって最も重要なことは、インターネット・インストーラを利用した場合はす

すべてのパッケージについて入手可能な最新バージョンがインストールされますが、DVD や ISO イメージを用いた場合には年に 1 度のパブリックリリース時点での最新版がインストールされるということです。

もしプロキシを利用してダウンロードする必要がある場合は、`~/.wgetrc` ファイルまたは環境変数を利用して Wget に対して適切なプロキシ設定を行うか (https://www.gnu.org/software/wget/manual/html_node/Proxies.html), もしくはお好みで他のダウンロード用ツールをご利用ください。DVD や ISO イメージからインストールを行う場合は、プロキシ設定について気にする必要はありません。

以降のセクションでは、このインストーラの使い方について詳しく説明します。

3.1.1 UNIX

以降では `>` はシェル・プロンプトを表し、ユーザの入力はタイプライタ体で `command` のように表現することにします。TeX Live のインストーラ `install-tl` は Perl スクリプトです。UNIX 互換なシステムでこのスクリプトを起動する最も簡単な方法は以下を実行することです：

```
> perl /path/to/installer/install-tl
```

(もちろん、実行権限を与えていれば単に `/path/to/installer/install-tl` として起動することもできますし、事前に `cd` で `install-tl` のあるディレクトリに移動しても構いません。以降では、そのようなバリエーションについて逐一言及はしません。) ところで、インストーラのメッセージを見やすく表示するためには、ターミナルのウィンドウサイズは十分に大きくしておいてください (図 2)。

インストーラを GUI モードで起動するためには、予め Tcl/Tk をインストールしておく必要があります。その上で、次のようにすると GUI モードで起動できます：

```
> perl install-tl -gui
```

古い wizard モードや `perlTk/expert` オプションは、現在も使用可能です。これらは XFT サポートありでコンパイルされた `Perl::Tk` モジュールを必要とします。この要件は、基本的には GNU/Linux では問題になりませんが、他のプラットフォームでは問題かもしれません。利用可能なすべてのオプションを確認するには次を実行してください：

```
> perl install-tl -help
```

■UNIX のパーミッションについて TeX Live インストーラは、実行時の `umask` 設定を反映します。したがって、もし利用中のユーザだけでなく他のユーザも利用可能な形で TeX Live をインストールしたい場合は、`umask 002` など適切なパーミッション設定になっているかよくご確認ください。umask コマンドの詳細については、システムのマニュアルを参照してください。

■Cygwin への注意 他の UNIX 互換システムと異なり、Cygwin にはデフォルトでは TeX Live インストーラの実行に必要なプログラムの一部が含まれていません。詳細は 3.1.4 節を参照してください。

3.1.2 macOS

2.1 節でも言及したように、macOS には MacTeX という専用のディストリビューションがあります (<https://tug.org/mactex>)。MacTeX のインストーラは macOS 向けにいくつかの最適化をしている (たとえば、いわゆる「TeXDist データ構造」を利用して複数の macOS 向け TeX ディストリビューション

(MacTeX, Fink, MacPorts, ...) を簡単に切り替える機能があります) ので, TeX Live インストーラを利用するよりも, MacTeX を利用したインストールをおすすめします (訳注: ただし敢えて TeX Live インストーラを利用することも可能です).

MacTeX は完全な TeX Live ベースのディストリビューションで, 主要な TeX ツリーと含まれる実行バイナリはまったく同一です. 通常の TeX Live に, macOS 専用のドキュメントとアプリケーションがいくつか追加されています.

3.1.3 Windows

もし ZIP ファイルをご自身でダウンロードして展開した場合や DVD を挿入しても自動的にインストーラが起動しなかった場合は, `install-tl-windows.bat` をダブルクリックしてください.

もしくは, コマンドプロンプトを利用してインストーラを起動することも可能です. 以下では `>` はプロンプトを表し, ユーザの入力はタイプライタ体で `command` のように表現することにします. もし, 既にインストーラのあるディレクトリにいる場合は単に

```
> install-tl-windows
```

を実行してください. もちろん絶対パスを指定して起動することも可能です. 例えば, TeX コレクション DVD を利用していて, その光学ドライブが D: であれば:

```
> D:\texlive\install-tl-windows
```

図 3 は GUI インストーラ (Windows ではデフォルト) の初期画面を示しています.

テキストモードでのインストールを行いたい場合は次のようにしてください:

```
> install-tl-windows -no-gui
```

すべてのオプションを表示するには以下を実行してください:

```
> install-tl-windows -help
```

3.1.4 Cygwin

Cygwin では, TeX Live のインストールを始める前に `setup.exe` プログラムを用いて (もし未導入の場合は) `perl` と `wget` をインストールするようにしてください. また以下のパッケージも予めインストールしておくことをおすすめします:

- `fontconfig` (X_YTeX と LuaTeX のため)
- `ghostscript` (多くの TeX エンジンのため)
- `libXaw7` (xdvi のため)
- `ncurses` (インストーラの `clear` コマンドの実行に必要)

3.1.5 テキストモード

図 2 は UNIX におけるテキストモードのメイン画面を示しています. テキストモードは UNIX ではデフォルトです.

```
Installing TeX Live 2019 from: ...
Platform: x86_64-linux => 'GNU/Linux on x86_64'
Distribution: inst (compressed)
Directory for temporary files: /tmp
...
Detected platform: GNU/Linux on Intel x86_64

<B> binary platforms: 1 out of 16

<S> set installation scheme: scheme-full

<C> customizing installation collections
    40 collections out of 41, disk space required: 5829 MB

<D> directories:
    TEXDIR (the main TeX directory):
        /usr/local/texlive/2019
    ...

<O> options:
    [ ] use letter size instead of A4 by default
    ...

<V> set up for portable installation

Actions:
<I> start installation to hard disk
<P> save installation profile to 'texlive.profile' and exit
<H> help
<Q> quit
```

図2 TeX Live インストーラのテキストモードでのメイン画面 (GNU/Linux)

このモードは、完全にコマンドラインで完結するもので、カーソルによる操作のサポートはまったくありません。例えば、Tab キーによってチェックボックスや入力フォーム間を移動することはできません。インストール操作はすべて、プロンプトに文字をタイプ（大文字と小文字は区別されます）して Enter キーを押すことによって行います。ターミナルの画面は、入力にしたがって適切に遷移していきます。

テキストモードのインターフェースは、最小限の Perl しかない環境を含めなるべく多くのプラットフォームで動作するようとても原始的に作られています（訳注：GUI モードは日本語を含む多言語に対応していますが、テキストモードは英語のみです）。

3.1.6 GUI モード

GUI モードはデフォルトではわずかなオプションのみを提供するシンプルな画面でスタートします（図 3）。GUI モードを起動するには

```
> install-tl -gui
```

を実行します。「高度な設定」ボタンを押すとテキストモードとほぼ同程度のオプションを提供する画面に切り替わります（図 4）。



図 3 TeX Live インストーラの基本画面 (macOS). 「高度な設定」ボタンを押すと図 4 のような画面に切り替わります.



図 4 TeX Live インストーラ GUI モードの「高度な設定」画面 (macOS)

3.1.7 その他のレガシーなモード

古い perlTk モード, expert モード, wizard モードは現在も Perl/Tk がインストールされていれば利用可能です. これらはそれぞれインストーラに `-gui=perlTk` や `-gui=wizard` オプションを与えると起動できます.


```

Available platforms:
=====
a [ ] Cygwin on Intel x86 (i386-cygwin)
b [ ] Cygwin on x86_64 (x86_64-cygwin)
c [ ] MacOSX current (10.12-) on x86_64 (x86_64-darwin)
d [ ] MacOSX legacy (10.6-) on x86_64 (x86_64-darwinlegacy)
e [ ] FreeBSD on x86_64 (amd64-freebsd)
f [ ] FreeBSD on Intel x86 (i386-freebsd)
g [ ] GNU/Linux on ARM64 (aarch64-linux)
h [ ] GNU/Linux on ARMhf (armhf-linux)
i [ ] GNU/Linux on Intel x86 (i386-linux)
j [X] GNU/Linux on x86_64 (x86_64-linux)
k [ ] GNU/Linux on x86_64 with musl (x86_64-linuxmusl)
l [ ] NetBSD on x86_64 (amd64-netbsd)
m [ ] NetBSD on Intel x86 (i386-netbsd)
o [ ] Solaris on Intel x86 (i386-solaris)
p [ ] Solaris on x86_64 (x86_64-solaris)
s [ ] Windows (win32)

```

図5 バイナリ選択メニュー

3.2 インストーラの操作方法

インストーラは直感的に操作できるように設計されていますが、このセクションでは多様なオプションやサブメニューについて簡単に説明します。

3.2.1 バイナリ選択メニュー (UNIX のみ)

図5はテキストモードのバイナリ選択メニューを示しています。デフォルトではインストーラ実行時に使用中のプラットフォーム向けのバイナリだけがインストールされます。このメニューを利用すると、その他のプラットフォーム向けのバイナリも同様にインストールを選択することができます。このメニューはTeX ツリーをさまざまな環境に共通のネットワークで共有する場合やデュアルブートシステムでは有用です。

3.2.2 スキーム・コレクションの選択

```

Select scheme:
=====
a [X] full scheme (everything)
b [ ] medium scheme (small + more packages and languages)
c [ ] small scheme (basic + xetex, metapost, a few languages)
d [ ] basic scheme (plain and latex)
e [ ] minimal scheme (plain only)
f [ ] ConTeXt scheme
g [ ] GUST TeX Live scheme
h [ ] infrastructure-only scheme (no TeX at all)
i [ ] teTeX scheme (more than medium, but nowhere near full)
j [ ] custom selection of collections

```

図6 スキーム選択メニュー

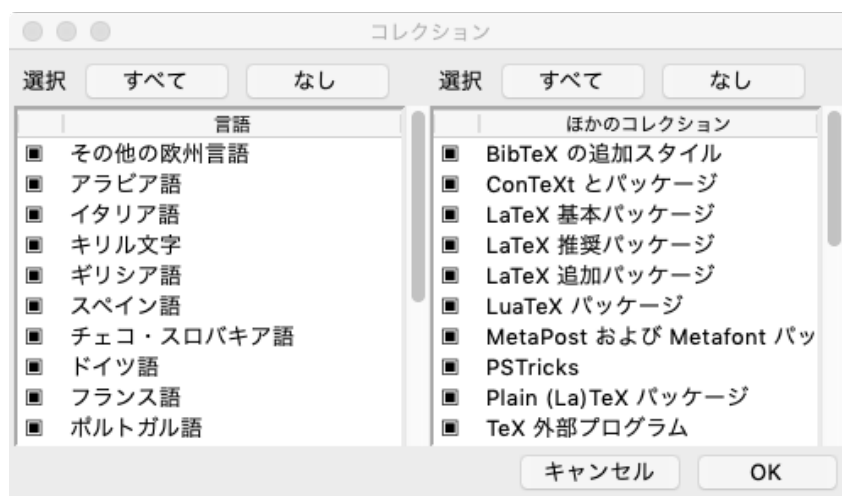


図 7 コレクション選択メニュー

図 6 は T_EX Live のスキーム選択メニューです。これによって、好きなスキーム（パッケージコレクションのセット）を選んでインストールを行うことができます。デフォルトでは T_EX Live で利用可能なすべてのパッケージを含む full スキームがインストールされます。おすすめはこの full スキームですが、純粋な plain T_EX と L^AT_EX だけを使用するなら basic、それに少しプログラムを追加したものである small（これは MacT_EX における BasicT_EX と同等です）、単なるテスト目的なら minimal、あるいはそれらの中間にあたるものが欲しければ medium や teT_EX スキームを選択することもできます。その他にも、多数の目的別もしくは言語別のスキームが用意されています。

コレクション選択メニュー（図 7）を活用すると選択したスキームをさらに利用目的に応じて最適化することができます（訳注：full スキーム以外のスキームには日本語組版に必要な pT_EX 系エンジンや LuaT_EX-j_a などは含まれていません。したがって full スキーム以外のスキームを選択した場合、日本語組版を行うためには原則として日本語コレクション (collection-langjapanese) を追加する必要があります)。

コレクションはスキームよりも細かなパッケージのセットです。基本的には、スキームというのはいくつかのコレクションを集めたもので、コレクションは 1 つまたは複数のパッケージをまとめたものです。パッケージは T_EX Live におけるプロダクトの最小単位で、具体的には実際の T_EX マクロファイルやフォントファイルから成るものです。

もしコレクション選択メニューが提供するよりもさらに細かくインストールするものを制御したい場合は、インストール後に T_EX Live マネージャ (tlmgr) を使用してください。T_EX Live マネージャを利用すればパッケージ単位でインストールを行うことが可能です。

3.2.3 インストール先ディレクトリ

デフォルトの T_EX Live 構成については 2.3 節 (p. 8) で説明しました。デフォルトのインストール先は UNIX では /usr/local/texlive/2019, Windows では %SystemDrive%\texlive\2019 です。この配置は複数の T_EX Live を同時にインストールすることを可能にします。例えば複数のリリース（典型的には、年度ごと）の T_EX Live をインストールしておき、単純に検索パスを変更することによってどのリリースを使用するか切り替えるようなことができます。

インストール先のディレクトリはインストーラにおける TEXDIR を設定することによって変更することができます。GUI モードで TEXDIR やその他のオプションを設定するための画面は図 4 に示されています。インストール先を変更する必要があるのは、デフォルトのインストール先にあたるパーティションに十分な空き容量がない場合 (T_EX Live をフルインストールするには数 GB の容量が必要となります) や書き込み権限がない場合です (T_EX Live をインストールするのに管理者 (root) 権限は必要ありませんが、インストール先ディレクトリへの書き込み権限は必要です)。

インストール先のディレクトリは、インストーラを実行する前にいくつかの環境変数 (よく用いられるのは `TEXLIVE_INSTALL_PREFIX` と `TEXLIVE_INSTALL_TEXDIR`) を設定することによっても変更できます。詳細については `install-tl --help` により表示できるドキュメント (<https://tug.org/texlive/doc/install-tl.html>) を参照してください。

合理的なインストール場所の変更先は (特にあなたが T_EX Live を利用する単独のユーザである場合には) ホームディレクトリ以下でしょう。メタ文字 `~` (チルダ) を用いるとこれを簡単に指定することができます (例: `~/texlive/2019`)。

複数の T_EX Live リリースを同時にインストールできるようにするためにも、インストール先のディレクトリ名には「年」を含めることをおすすめします (もし `/usr/local/texlive-cur` などバージョンに依存しない名前管理したいとお考えであれば、シンボリックリンクを利用して新しいリリースをテストしてからそのリンク先を変更するようにするのも良いでしょう)。

インストーラにおける TEXDIR を変更すると `TEXMFLOCAL`, `TEXMFSYSVAR`, `TEXMFSYSCONFIG` にあたるディレクトリも合わせて変更されることになります。

`TEXMFHOME` はユーザごとのマクロファイルやパッケージを配置するのに適した場所で、デフォルトでは `~/texmf` です (macOS では `~/Library/texmf`)。TEXDIR の場合とは異なり、T_EX を実行しているユーザのホームディレクトリを簡単に参照できるように、このデフォルト値では `~` が各々のインストールのために生成された設定ファイルに書き込まれています。`~` は UNIX では `$HOME` に、Windows では `%USERPROFILE%` にそれぞれ展開されます。繰り返しの注意になりますが、`TEXMFHOME` も他の `TEXMF` ツリーと同様に TDS にしたがつた構成になっているべきです (必要のないファイルやディレクトリは配置されていなくも構いません)。

`TEXMFVAR` はほとんどの (ユーザごとの) 実行時キャッシュが保存される場所です。`TEXMFCACHE` は Lua^AT_EX と ConT_EXt MkIV が使用するための変数で、デフォルトでは `TEXMFSYSVAR` または (もし `TEXMFSYSVAR` が書き込み可能でない場合は) `TEXMFVAR` に設定されています。詳細は 3.4.5 節 (p. 23) を参照してください。

3.2.4 オプション

図 8 はテキストモードにおけるオプションメニューです。以下に各オプションの詳細を列挙します：

use letter size instead of A4 by default (A4 サイズの代わりにレターサイズをデフォルトで使用) デフォルトの用紙サイズを選択します。当然ながら、各ドキュメントのサイズはその都度ドキュメントに合わせて指定することもできます。

execution of restricted list of programs (制限リストにあるプログラムの実行を許可) T_EX Live 2010 以降、いくつかの外部プログラムの実行がデフォルトで許可されるようになりました。実行が許可されている (数少ない) プログラムのリストは `texmf.cnf` に記載されています。詳細については T_EX Live 2010 のリリースノート (9.1.7 節) を参照してください。

```
Options customization:
=====
<P> use letter size instead of A4 by default: [ ]
<E> execution of restricted list of programs: [X]
<F> create all format files: [X]
<D> install font/macro doc tree: [X]
<S> install font/macro source tree: [X]
<L> create symlinks in standard directories: [ ]
      binaries to:
      manpages to:
      info to:
<Y> after install, set CTAN as source for package updates: [X]
```

図 8 Options menu (Unix)

create all format files (すべてのフォーマットファイルを作成) 必要のないフォーマットの生成 (ダンプ) には時間がかかりますし、ディスク容量も使用しますが、それでもこのオプションは有効にしておくことを推奨します。このオプションを無効にした場合、各ユーザがフォーマットを使用したいときにフォーマットが生成され、TEXMFVAR ツリーに保存されることになります。その場合、生成されたフォーマットは、仮にバイナリやハイフンパターンの更新が入ったとしても、自動的にアップデートされないため、いつまでも非互換なフォーマットファイルを使用し続けることになる可能性があります。

install font/macro ... tree (フォント・マクロの ~ ツリーをインストール) 多くのパッケージに付属するソースファイルとドキュメントをダウンロード・インストールするか否かを選択するオプションです。このオプションを無効化することは非推奨です。

create symlinks in standard directories (標準ディレクトリにシンボリックリンクを作成) このオプションは UNIX のみで利用可能で、環境変数の変更を回避する手段です。このオプションを有効にしない場合、T_EX Live のディレクトリは通常手動で PATH, MANPATH, INFOPATH に追加する必要があります。ただし、シンボリックリンクの作成先ディレクトリについて書き込み権限が必要です。このオプションは一般的に知られた /usr/local/bin などのディレクトリ (ただし T_EX 関連コマンドがまだインストールされていない場所) に T_EX 関連コマンドを配置するためのものです。シンボリックリンクの作成先にシステムディレクトリを指定するなどして、元々システムに存在していたファイルを上書きしてしまわないようご注意ください。安全のため、このオプションは有効にしないことをおすすめします。

after install, set CTAN as source for package updates (CTAN をインストール後のパッケージ更新元に設定) T_EX Live を DVD からインストールする場合、このオプションはデフォルトで有効です。大抵の場合、T_EX Live のユーザは年内に行われるパッケージのアップデートを受け取りたいと考えるためです。このオプションを無効化する場合があるとしたら、例えば DVD からは一部のインストールのみを行って、後に (別の方法で) 補強したいような場合でしょう。いずれにせよ、インストール時およびインストール後に利用するパッケージリポジトリは、必要に応じて独立に設定することが可能です。詳細は [3.3.1 節](#) と [3.4.3 節](#) を参照してください。

Windows のみで利用可能なオプションも、上級者向けの Perl/Tk インターフェースで利用可能です：

adjust PATH setting in registry (レジストリの PATH 設定を最適化) このオプションによってすべてのプログラムが確実に検索パス中で T_EX Live のバイナリを見つけられるようになります。

add menu shortcuts (メニューにショートカットを追加) このオプションが有効の場合、スタートメニュー

に T_EX Live サブメニューが追加されます。ここには ‘TeX Live menu’ と ‘No shortcuts’ の他に ‘Launcher entry’ という第三の選択肢もあります。このオプションについては 4.1 節で説明します。

change file associations (拡張子の関連付けを変更) このオプションでの選択肢は ‘Only new’ (拡張子の関連付けを行うが、既に存在する関連付けの上書きは行わない), ‘All’, ‘None’ の 3 つです。

install T_EXworks front end (統合開発環境 T_EXworks をインストール)

すべての設定が済みましたら、テキストモードでは ‘I’ をタイプ、Perl/Tk の GUI モードでは ‘Install TeX Live’ ボタンを押すことによってインストールを実行してください。インストールが完了したら (他にすることがなければ) 3.4 節までスキップしてください。

3.3 install-tl のコマンドラインオプション

次を実行すると、install-tl のコマンドラインオプションの一覧を確認することができます：

```
> install-tl -help
```

オプション名を指定するには - または -- を利用できます。以下では、一般的なオプションについてのみ説明します：

- gui インストーラを (もし利用可能なら) GUI モードで起動します。GUI モードの実行にはバージョン 8.5 以上の Tcl/Tk が必要です。これは macOS ではご自身でインストールしていただく必要がありますが、Windows 用の T_EX Live には同梱されているため特に何もする必要はありません。古いオプションである -gui=perltk と -gui=wizard は現在も利用可能です。これらの実行のためには XFT サポートが有効な Perl/Tk モジュールが必要です (<https://tug.org/texlive/distro.html#perltk>)。Tcl/Tk と Perl/Tk が利用可能でない場合、このオプションが指定された場合でもインストーラはテキストモードで続行されます。
- no-gui インストーラを必ずテキストモードで起動します。
- lang <言語コード> 指定した <言語コード> (通常 2 文字) にあたる言語を使用します (訳注：日本語を使用したい場合は -lang ja とします)。インストーラは自動的に最適な言語で起動しますが、もし自動判定に失敗した場合や最適な言語が利用不可能な場合は、英語を使用します。インストーラで利用可能な言語の一覧は install-tl -help で確認できます。
- portable T_EX Live を USB メモリなどにポータブルインストールします。ポータブルインストールは、インストーラの起動後にテキストモードの V コマンドまたは GUI モードのメニューを利用して選択することもできます。詳細は 4.2 節を参照してください。
- profile <ファイル> インストールプロファイル <ファイル> を読み込み、非対話的にインストールを実行します。なおインストーラは常に texlive.profile を tlpkg ディレクトリに書き込みます。このファイルを利用すると、まったく同じ設定でインストールを (例えば別のシステムでも) 再実行することが可能です。別の活用方法として、ご自身で用意したカスタムプロファイル (生成された texlive.profile を改変するのが簡単です) を使用したり、空のファイルを指定してすべてをデフォルト設定でインストールしたりすることもできます。
- repository <リポジトリ> パッケージリポジトリ (ディレクトリまたは URL) を指定します。下の 3.3.1 節を参照してください。

`-in-place`（警告：このオプションは何をしようとしているのか完全に承知している場合以外は使用しないでください。）すでに `rsync` や `svn` またはその他の手段で TeX Live のコピー（その入手元については <https://tug.org/texlive/acquire-mirror.html> を参照）が手許にある場合、このオプションを利用するとそのコピーをそのまま利用し、追加で必要となるものがものをだけをインストールします。なお `tlpkg/texlive.tlpdb` は上書きされるので、ご自身の責任で保存するようにしてください。また、既にあるパッケージの除去は手動で行う必要があります。このオプションは起動後にインストーラのインターフェースで有効にすることはできません。

3.3.1 `-repository` オプション

デフォルトのネットワーク上パッケージリポジトリは <http://mirror.ctan.org> によって自動的に選択される CTAN ミラーです。

このデフォルトを上書きしたい場合は、使用したいリポジトリを `ftp:`、`http:`、`file:/` のいずれかからはじまる URL、または通常のディレクトリパスによって指定します（`http:` または `ftp:` から始まるリポジトリ指定を行った場合、末尾の `/` や `/tlpkg` は無視されます）。

例えば CTAN の特定のミラーサーバを <http://ctan.example.org/tex-archive/systems/texlive/tlnet/> のように指定した場合、実際のホスト名と、そのホストにおける CTAN のトップレベルパスを `ctan.example.org/tex-archive` の代わりに使用します。CTAN ミラーの一覧は <https://ctan.org/mirrors> で確認できます。

もし与えられた引数が（パスまたは `file:/` URL の形で）ローカルのディレクトリを指していた場合、その下にある `archive` サブディレクトリ内の圧縮ファイルが（仮に展開済みのものがあっても）使用されます。

3.4 インストール後のアクション

場合によっては、インストール後に多少の手順を行う必要があるかもしれません。

3.4.1 UNIX における環境変数の設定

インストール時に標準ディレクトリにシンボリックリンクを作成している（3.2.4 節を参照）場合は、環境変数を変更する必要はありません。それ以外の場合、UNIX システムではご使用のプラットフォーム向けのバイナリのあるディレクトリを検索パスに追加する必要があります（Windows ではインストーラが行うので気にする必要はありません）。

TeX Live にサポートされている各プラットフォームには `TEXDIR/bin` 以下に専用のサブディレクトリがあります。専用サブディレクトリのリストと、それぞれに対応するプラットフォームについては図 5 を参照してください。

さらに、必要であれば `man` ページと `info` マニュアルを含むディレクトリを、それぞれの検索パスに追加することができます。ただし `man` ページについては `PATH` を設定することによって自動的に検索可能になる場合もあります。

例えば、Intel x86 アーキテクチャ上の GNU/Linux で `bash` など Bourne シェルと互換性のあるシェルを使用していて、なおかつデフォルトのディレクトリ設定の環境の下では `$HOME/.profile`（もしくは `.profile`

から読み込まれている別のファイルでも構いません）に次のような行を追加することで環境変数を設定できます：

```
PATH=/usr/local/texlive/2019/bin/x86_64-linux:$PATH; export PATH
MANPATH=/usr/local/texlive/2019/texmf-dist/doc/man:$MANPATH; export MANPATH
INFOPATH=/usr/local/texlive/2019/texmf-dist/doc/info:$INFOPATH; export INFOPATH
```

csh や tcsh の場合は、編集すべきファイルは典型的には `$HOME/.cshrc` で、次のような行を追加します：

```
setenv PATH /usr/local/texlive/2019/bin/x86_64-linux:$PATH
setenv MANPATH /usr/local/texlive/2019/texmf-dist/doc/man:$MANPATH
setenv INFOPATH /usr/local/texlive/2019/texmf-dist/doc/info:$INFOPATH
```

もちろん、既にいわゆる「ドットファイル」（各種の設定ファイル）に何かしらの設定を記入している場合は、TeX Live 用のディレクトリは他の設定と競合しないよう適切に設定されるべきです。

3.4.2 環境変数をグローバルに設定する

もし前節で説明したような環境変数の変更をシステム全体に適用したい場合や、新しいユーザにも適用したい場合は、ご自身の力で設定を行ってください。なぜなら、そのようなことを実現する方法は、システムによってあまりに異なるからです。

ここでは 2 つほど大まかな方針を示しておきます。第一に `/etc/manpath.config` というファイルの存在を確かめて、もし存在していたら次のような内容を追記します：

```
MANPATH_MAP /usr/local/texlive/2019/bin/x86_64-linux \
    /usr/local/texlive/2019/texmf-dist/doc/man
```

第二に各種の検索パスや環境変数のデフォルト値を設定するためのファイル `/etc/environment` の内容を確認することです。

各 UNIX 向けのバイナリディレクトリには、`man` という名前の `texmf-dist/doc/man` を指すシンボリックリンクが作成されています。一部の `man` プログラム（例えば macOS の標準 `man` コマンド）は、これを利用して自動的に `man` ページの設定を最適化してくれる場合があります。

3.4.3 DVD インストール後のインターネットを利用したアップデート

TeX Live を DVD からインストールした後、インターネットを利用してアップデートを行いたい場合は、以下のコマンドを検索パスの設定の後に行ってください：

```
> tlmgr option repository http://mirror.ctan.org/systems/texlive/tlnet
```

これによって以降 `tlmgr` は最寄りの CTAN ミラーを利用してアップデートを行うようになります。DVD からのインストール時に 3.2.4 節で説明したオプションを介してこの設定をデフォルトにしておくこともできます。

もしミラーの自動選択では問題がある場合は、<https://ctan.org/mirrors> から特定の CTAN ミラーを指定することもできます。その際は `tlnet` サブディレクトリまでのパスを正確に指定するようにしてください。

3.4.4 X_YT_EX と LuaT_EX のためのシステム設定

X_YT_EX と LuaT_EX では、T_EX ツリーに存在するものだけでなく、システムにインストールされているあらゆるフォントを利用することができます。これらのエンジンは互いに関連する方法でこれを実現していますが、そのしくみはまったく同じではありません。

Windows では、T_EX Live に含まれているフォントは自動的にフォント名を指定するだけで X_YT_EX から利用できるように設定されます。macOS では、フォント名による検索を有効にするためにはいくつかの手順が必要です（詳細は MacT_EX のウェブサイト <https://tug.org/mactex> を参照してください）。他の UNIX システムでの設定方法は、以下の通りです。

この設定を簡単にするために、xetex パッケージのインストール時（最初の T_EX Live インストール時または追加インストール時）に必要な設定が TEXMFSYSVAR/fonts/conf/texlive-fontconfig.conf に作成されます。T_EX Live フォントをシステム全体で利用できるようにするためには、次の手順を実行します（そのために必要な権限は持っているものとします）：

1. texlive-fontconfig.conf を /etc/fonts/conf.d/09-texlive.conf にコピーする。
2. fc-cache -fsv を実行する。

fc-list を実行するとシステムにあるフォントの一覧を確認することができます。また fc-list : family style file spacing（タイプミスに注意してください）とすると、もう少し詳細な情報を表示することができます。

3.4.5 ConT_EXt Mark IV

「古い」ConT_EXt (Mark II) と「新しい」ConT_EXt (Mark IV) はいずれも T_EX Live のインストール後はそのまま動く状態になっているはずで、tlmgr を使用してアップデートを行っている限りは特に特別な設定を行う必要はありません。

しかしながら、ConT_EXt MkIV は Kpathsea ライブラリを使用していないので、tlmgr を使用せず手動で新しいファイルをインストールした場合にはいくつかの設定を行う必要があります。そのような手動インストールを行った場合には、MkIV ユーザは次を実行して ConT_EXt のディスクキャッシュデータをクリアする必要があります：

```
> context -generate
```

なお、この操作によって生成されるファイルは TEXMFCACHE（デフォルト値は TEXMFSYSVAR;TEXMFVAR）以下に保存されます。

ConT_EXt MkIV は TEXMFCACHE に列挙されているパスを前から確認し、そして書込み可能な最初の場所にキャッシュを作成します。読み込みの際は、複数のキャッシュが見つかった場合は（見つかったキャッシュの中で）一番最後のパスにあるものが優先されます。

より詳細な情報については https://wiki.contextgarden.net/Running_Mark_IV を参照してください。

3.4.6 ローカルおよび個人用のマクロを利用する

ローカルおよび個人用のマクロの配置方法については 2.3 節でも簡単に言及しましたが、TEXMFLOCAL（デフォルトでは /usr/local/texlive/texmf-local または %SystemDrive%\texlive\texmf-local）はシ

システム全体に適用したいローカルなフォントやマクロを、TEXMFHOME（デフォルトでは \$HOME/texmf または %USERPROFILE%\texmf）はユーザごとの個人用フォントやマクロを配置するためのものです。これらのディレクトリは毎年のリリースとは切り離して管理されることが意図されており、そこに含まれているファイルは自動的に各 T_EX Live リリースから検索できるようになっています。したがって、TEXMFLOCAL の値をメインの T_EX Live ツリーとあまりかけ離れた位置に変更することは避けるべきです。さもないと将来のリリースの際に手動で変更を行う必要が発生する可能性があります。

いずれのツリーについても、それぞれのファイルは TDS に基づいたサブディレクトリに配置されているべきです (<https://tug.org/tds> や texmf-dist/web2c/texmf.cnf を参照してください)。例えば L^AT_EX のクラスファイルやパッケージは TEXMFLOCAL/tex/latex や TEXMFHOME/tex/latex、あるいはそれより下の階層に配置されているべきです。

TEXMFLOCAL については最新の状況を反映したファイル名データベースがないと、その中にあるファイルが見つけれられません。データベースは mktexlsr コマンドを実行するか、GUI 版 T_EX Live マネージャで ‘Reinit file database’ ボタンを押すことによって更新することができます。

デフォルトでは、これまで見てきたように各 TEXMF ツリーを表す変数は 1 つのディレクトリを指すように定義されています。しかし、これは絶対そうでなければならないわけではありません。例えば、もし複数のバージョンの大きなパッケージを簡単に切り替える必要があるような場合は、複数のツリーを用意した上で TEXMFHOME をブレースで囲われたカンマ区切りのディレクトリ名リストに設定するとよいでしょう：

```
TEXMFHOME = {/my/dir1,/mydir2,/a/third/dir}
```

ブレース展開については 7.1.5 節により詳しい解説があります。

3.4.7 サードパーティフォントを利用する

これは残念ながら泥沼への入り口です。T_EX インストールの深淵に飛び込みたい場合を除いては、すべての T_EX 処理系でサードパーティフォントを利用できるようにすることは諦めた方が無難です。T_EX Live には数多くのフォントが含まれているので、それらの中に適当なものがないか探してみてください（既に適するものがないとわかっている場合は仕方ありません）。

ただし X_YL^AT_EX または LuaT_EX (2.4 節) であれば T_EX のために特別な設定を行わなくても OS にインストールされたあらゆるフォントを利用することができます。

もしどうしてもサードパーティフォントを一般の T_EX 処理系で利用できるように設定を行う必要がある場合は、<https://tug.org/fonts/fontinstall.html> にその方法について（可能な範囲での）解説がありますので、参考にしてください。

3.5 インストールした T_EX Live をテストする

T_EX Live をインストールした後、美しい文書やフォントの作成を始めるために T_EX Live が正常に動作するかテストしたいと思うのが普通でしょう。

おそらく、多くの人がまず最初に動作確認したいのはファイル編集を行うフロントエンドでしょう。T_EX Live は Widows（のみ）では T_EXworks (<https://tug.org/texworks>) を、MacT_EX は T_EXShop (<https://pages.uoregon.edu/koch/texshop>) をインストールします。他の UNIX システムではどのエディタを利用するかはユーザが決めてください。エディタの選択肢はとてたくさんあり、その一部は次のセ

クションでリストアップされています。また <https://tug.org/interest.html#editors> も参考になるかと思います。基本的にはどんなテキストエディタでも使用できます。TeX のための特別な機能は、なくてはならないものではありません。

残りのセクションでは、新しい TeX Live が正常に動作するか確認する基本的な手順を解説します。なお、ここでは UNIX コマンドを使用した方法を紹介します。macOS や Windows のユーザは、GUI を利用してテストをしたいと考えるかもしれませんが、根本的な部分は変わりません。

1. まずはじめに、tex プログラムが実行可能であることを確認しましょう：

```
> tex -version
TeX 3.14159265 (TeX Live ...)
Copyright ... D.E. Knuth.
...
```

もしこれを実行したとき、正しいバージョン情報・コピーライト情報の代わりに ‘command not found’ エラーが出たり、古いバージョン情報が表示される場合は、正しい bin ディレクトリが PATH に追加されていない可能性が高いです。そのような場合は p. 21 にある環境変数設定の情報を確認してください。

2. 基本的な L^AT_EX ファイルを処理してみましょう：

```
> latex sample2e.tex
This is pdfTeX 3.14...
...
Output written on sample2e.dvi (3 pages, 7484 bytes).
Transcript written on sample2e.log.
```

sample2e.tex やその他のファイルが見つからないというエラーが出る場合は、古い環境変数の設定や設定ファイルの影響を受けてしまっている可能性が高いです。まずは TeX 関係の環境変数をすべてクリアすることをおすすめします。（より詳細に分析したい場合は、TeX 自身に何を検索し、何を見つけたのか報告させるのが良いでしょう。詳細は 7.2.4 節を参照してください。）

3. 次に処理結果をプレビューしてみましょう：

```
> xdvi sample2e.dvi    # Unix
> dviout sample2e.dvi  # Windows
```

すると、新しいウィンドウがポップして L^AT_EX の基礎について説明した素敵な文書が表示されるはずです（ところで、もし TeX を使うのが初めてでしたら、その内容も一読の価値があります）。なお xdvi コマンドを利用するには X ウィンドウシステムが正しく動作している必要があります。正常に動作していない場合や、環境変数 DISPLAY の設定がまずい場合は ‘Can’t open display’ エラーが発生します。

4. 続いて PostScript ファイルを作成してみましょう：

```
> dvips sample2e.dvi -o sample2e.ps
```

5. 今度は DVI ファイルの代わりに PDF ファイルを作成します。今回は .tex ファイルから直接 PDF を

生成してみます：

```
> pdflatex sample2e.tex
```

6. 生成した PDF もプレビューしてみましょう：

```
> gv sample2e.pdf
```

または

```
> xpdf sample2e.pdf
```

gv も xpdf も T_EX Live には含まれていないので、ご自身でインストールする必要があります。詳細はそれぞれ <https://www.gnu.org/software/gv> と <https://www.xpdfreader.com/> を参照してください。PDF ビューアは他にもたくさんあります。例えば Windows では Sumatra PDF (<https://www.sumatrapdfreader.org/free-pdf-reader.html>) をおすすめします。

7. sample2e.tex 以外でテストのために利用できる標準的なファイルを以下に示しておきます：

small2e.tex sample2e.tex よりもシンプルな文書です。なにか問題が発生したときに、より入力サイズの小さいものとして利用できます。

testpage.tex プリンタにオフセットがあるかどうかを確認するための文書です。

nfssfont.tex フォントテーブルを出力・テストするためのものです。

testfont.tex plain T_EX を用いて、同じくフォントテーブルを出力するものです。

story.tex 最も標準的な (plain) T_EX のテスト用ファイルです。tex story.tex を実行後、* プロンプトに ‘\bye’ を入力する必要があります。

8. xetex パッケージをインストールしている場合には、XeT_EX がシステムフォントを正常に利用できるかどうかテストすることができます：

```
> xetex opentype-info.tex
```

```
This is XeTeX, Version 3.14...
```

```
...
```

```
Output written on opentype-info.pdf (1 page).
```

```
Transcript written on opentype-info.log.
```

もし “Invalid fontname ‘Latin Modern Roman/ICU’...” というエラーメッセージが表示された場合は、T_EX Live に含まれるフォントを見つけられるように設定を行う必要があります。3.4.4 節を参照してください。

3.6 その他のダウンロード可能なソフトウェア

T_EX 初心者や L^AT_EX 文書を実際に作成するにあたってヘルプが必要な方は、ぜひ <https://tug.org/begin.html> にアクセスしてみてください。いくつかの初心者向けの情報を掲載しています。

ここではインストールの検討に値する各種ツールへのリンクを列挙しておきます：

Ghostscript <https://ghostscript.com/>

Perl <https://www.perl.org/> (追加パッケージは CPAN (<https://www.cpan.org/>) から入手可)

ImageMagick <https://imagemagick.org/> (画像の加工や変換)

NetPBM <http://netpbm.sourceforge.net/> (こちらも画像用ツール)

TeX 向きのエディタ テキストエディタの選択肢はかなり多岐にわたり、その選択は完全に各自の好みによります。ここでは主なものをアルファベット順に紹介しておきます (一部は Windows 専用です)。

- GNU Emacs: <https://www.gnu.org/software/emacs/emacs.html> (Windows でも利用可)
- Emacs AucTeX: <https://www.gnu.org/software/auctex> (Windows 版は CTAN から入手可)
- SciTE: <https://www.scintilla.org/SciTE.html>
- Texmaker: <https://www.xm1math.net/texmaker>
- T_EXstudio: <https://texstudio.org/> (Texmaker のフォークプロジェクト)
- T_EXnicCenter: <http://www.texniccenter.org> (proT_EXt では標準添付)
- T_EXworks: <https://tug.org/texworks> (Windows 版 T_EX Live では標準添付)
- Vim: <https://www.vim.org>
- WinEdt: <https://tug.org/winedt>, <http://www.winedt.com> (シェアウェア)
- WinShell: <https://www.winshell.de>

4 特殊なインストール

ここまでは基本的なインストール手順について説明してきました。このセクションでは、いくつかの特殊なインストールについて解説します。

4.1 共有インストール

T_EX Live はネットワーク上の複数のシステムで共有できるように設計されています。標準のディレクトリ構成では、いかなるパスもハードコードされていません。T_EX Live に含まれるプログラムは必要なファイルを相対パスによって探索します。このことは、T_EX Live の根幹にあたる設定ファイル `$TEXMFDIST/web2c/texmf.cnf` を見ればわかります。そこには

```
TEXMFROOT = $SELFAUTOPARENT
...
TEXMFDIST = $TEXMFROOT/texmf-dist
...
TEXMFLOCAL = $SELFAUTOGRANDPARENT/texmf-local
```

のような記述が並んでいるはずですが、この仕組みのおかげで、各プラットフォーム向けの実行ファイルを、それぞれの検索パスに追加するだけで T_EX Live が機能するように設定できます。

同様に、一度ローカルに T_EX Live をインストールし、そのすべての階層をネットワーク上の場所に移動することも可能です。

Windows 向けには、T_EX Live は tlaunch というランチャーを含んでいます。そのメイン画面のメニューには種々の T_EX 関連プログラムおよびドキュメントについてアクションを起こすためのボタンがあります。この画面は ini ファイルによってカスタマイズすることも可能です。初回起動時には、それらのボタンは通常の Windows 向けポストインストールを実行 (すなわち検索パスと拡張子の関連付けを更新) しますが、こ

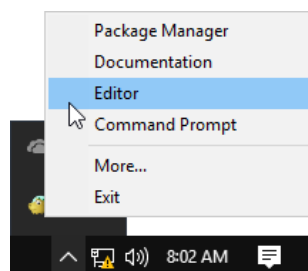
の操作は現在ログイン中のユーザにしか適用されません。したがって、ローカルネットワークにアクセスできる各システムで T_EX Live を利用できるようにするためには、tlaunch にメニューショートカットを追加するだけで事足ります。詳細については tlaunch のマニュアルを参照してください (texdoc tlaunch を実行するか <https://ctan.org/pkg/tlaunch> にアクセスすると閲覧できます)。

4.2 ポータブル (USB) インストール

T_EX Live インストーラに `-portable` オプションを与えると (テキストモードで `V` コマンドを実行したり GUI モードで同等のオプションを利用した場合も同様です) T_EX Live は完全に自己完備のインストールを標準的なルート以下に作成します。これはシステムのいかなる環境にも依存しません。このような構成の T_EX Live は USB メモリに直接インストールしたり、後から USB にコピーしたりすることができます。

ポータブルインストールされた T_EX を実行するには、通常通り実行ファイルのある適切なディレクトリを (端末セッションの間) 検索パスに追加する必要があります。

Windows では、ポータブルインストールのルートにある `tl-tray-menu` をダブルクリックすることによって一時的な ‘tray menu’ が作成され、これを用いていくつかの一般的なタスクを実行することができます：



この画面で ‘More...’ を押すと、このメニューのカスタマイズ方法についての説明が表示されます。

5 tlmgr: T_EX Live マネージャ

T_EX Live にはインストール後の T_EX Live 管理のために tlmgr というプログラムが同梱されています。その主な機能は：

- 個別パッケージのインストール、アップデート、バックアップ、アンインストール (依存関係管理も可)
- パッケージの検索と詳細の表示
- プラットフォームの表示、追加、削除
- インストールオプションの変更 (デフォルトの用紙サイズやソースの場所)

texconfig の機能はすべて tlmgr にも備わっています。T_EX Live チームは texconfig の操作に慣れている方々のために依然としてその配布およびメンテナンスを継続していますが、tlmgr を使用することをおすすめします。

5.1 tlmgr の GUI

T_EX Live には tlmgr の GUI が複数含まれています。tlshell (図 9) は Tcl/Tk を利用した GUI で Windows と macOS で利用可能です。tlcockpit はバージョン 8 以降の Java と JavaFX で動作する GUI です。これら

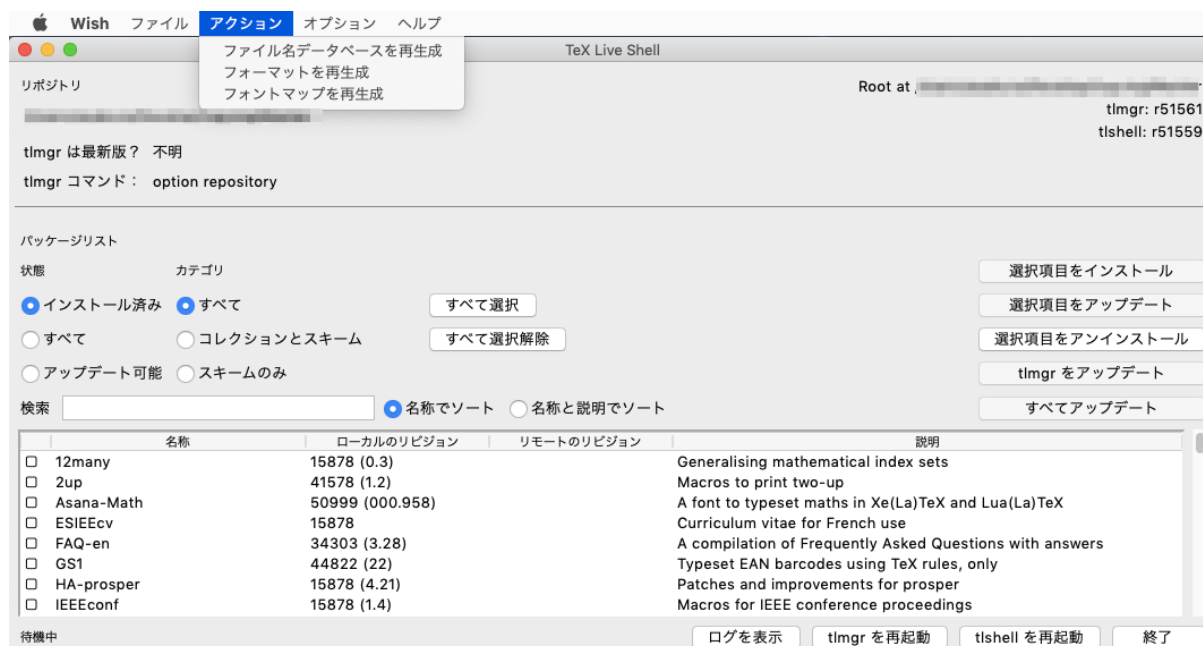


図 9 tlmgr GUI のアクションメニュー (macOS)

はいずれも独立したパッケージです。

tlmgr それ自体にも GUI モードが存在します (図 11) :

```
> tlmgr -gui
```

この GUI 拡張の実行には Perl/Tk が必要です。現在は Windows 向けの T_EX Live には Perl/Tk モジュールは同梱されていないので注意してください。

5.2 コマンド使用例

最初のインストールののち、T_EX Live を最新の状態にアップデートするには :

```
> tlmgr update -all
```

もし実際のアップデートを実行する前に何が起きるかを確認したい場合は :

```
> tlmgr update -all -dry-run
```

または (出力メッセージを減らすなら)

```
> tlmgr update -list
```

もう少し複雑な例として、X_YT_EX 用のコレクションをローカルディレクトリから追加する方法を示します :

```
> tlmgr -repository /local/mirror/tlnt install collection-xetex
```

これを実行すると、次のような出力が表示されます (一部省略しています) :

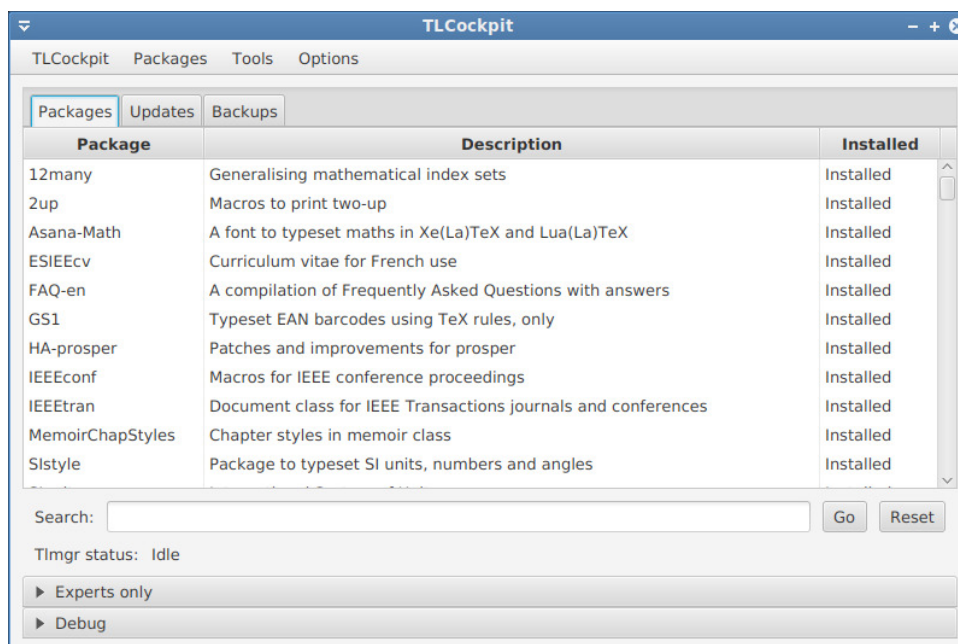


図 10 tlmgr の新しい GUI (tlcockpit)

```
install: collection-xetex
install: arabxetex
...
install: xetex
install: xetexconfig
install: xetex.i386-linux
running post install action for xetex
install: xetex-def
...
running mktexlsr
mktexlsr: Updating /usr/local/texlive/2019/texmf-dist/ls-R...
...
running fmtutil-sys --missing
...
Transcript written on xelatex.log.
fmtutil: /usr/local/texlive/2019/texmf-var/web2c/xetex/xelatex.fmt installed.
```

上の出力からわかるように、tlmgr は依存パッケージもインストールし、ファイル名データベースの更新やフォーマットの（再）生成など必要なインストール後処理も自動的に実行しています。ここでは Xe_ΛTeX 用の新しいフォーマットが生成されています。

パッケージ（またはコレクション、スキーム）の詳細を確認するには次のようにします：

```
> tlmgr show collection-latexextra
```

これにより以下のような出力が得られるはずです：

```
package:    collection-latexextra
category:   Collection
shortdesc:  LaTeX supplementary packages
longdesc:   A very large collection of add-on packages for LaTeX.
```

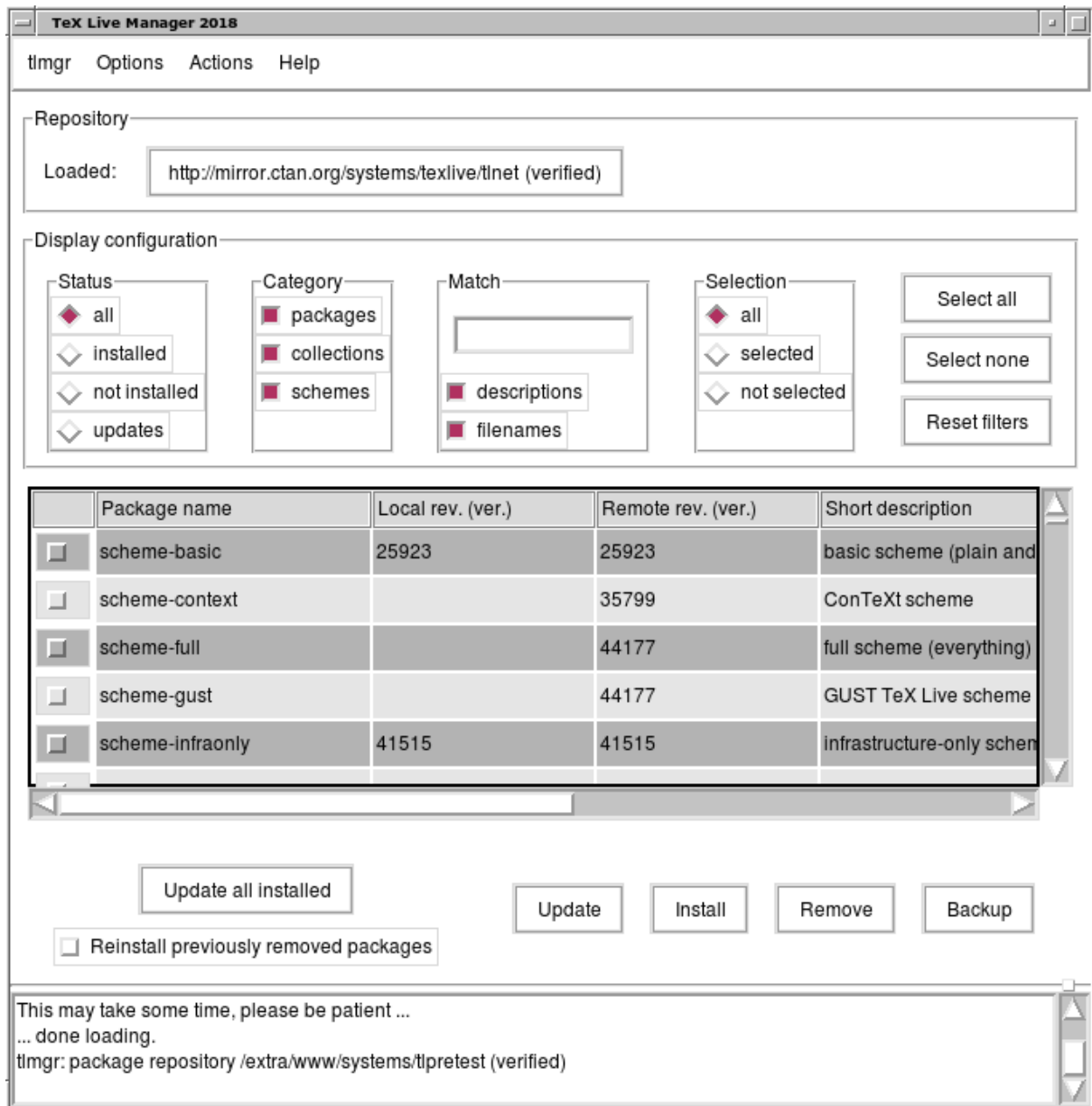


図 11 tlmgr のレガシー GUI モード. ‘Load’ 後のメインウィンドウ

```

installed:  Yes
revision:   46963
sizes:      657941k

```

最後に、最も大事なことです、フルドキュメントを確認するには <https://tug.org/texlive/tlmgr.html> にアクセスするか、以下を実行してください：

```
> tlmgr -help
```

6 Windows 向けの情報

6.1 Windows 専用の機能

Windows では \TeX Live はいくつか追加の処理を行います：

メニューとショートカット スタートメニューに ' \TeX Live' サブメニューを追加します。このサブメニューから `tlmgr`, `texdoctk` や PostScript ビューア (`psv`) などの GUI プログラムを起動したり、いくつかのドキュメントにアクセスしたりすることができます。

拡張子の関連付け 設定が有効になっている場合、 \TeX works, `Dviout`, `PS_View` などをそれぞれが扱う拡張子に関連付けます。また関連するファイルを右クリックして「プログラムから開く」を選択した場合に \TeX Live のプログラムが候補に上がるようになります。

ビットマップから EPS への変換 各種のビットマップ画像を右クリックして「プログラムから開く」を選択した場合に `bitmap2eps` を選択できるようになります。`bitmap2eps` はシンプルなスクリプトで、バックエンドとして `sam2p` や `bmeps` を利用します。

自動パス設定 Windows では手動でパス設定を行う必要はありません。

アンインストーラ 「プログラムの追加と削除」メニューの中に \TeX Live をアンインストールするための項目を追加します。これを使用すると GUI 版 \TeX Live マネージャのアンインストールタブが開きます。単一ユーザ向けに \TeX Live をインストールした場合は、スタートメニューにもアンインストール用の項目が追加されます。

書き込み禁止 管理者として \TeX Live をインストールした場合、 \TeX Live のディレクトリは書き込み禁止に設定されます（通常の NTFS フォーマット内蔵ディスクにインストールした場合）。

また `tlaunch` (4.1 節) も参照してみてください。

6.2 Windows 向けに追加されているソフトウェア

\TeX Live を完全にインストールするためには、Windows マシンには通常存在していないパッケージが必要となります。そのため \TeX Live は Windows 向けに一部の依存パッケージを同梱しています。以下に列挙するプログラムは Windows 版の \TeX Live にのみ含まれています：

Perl と Ghostscript Perl と Ghostscript は重要なので、 \TeX Live には隠されたそれらのコピーが含まれています。これらのプログラムは \TeX Live のプログラムからは利用可能ですが、環境変数やレジストリ設定の上では存在していないことになっています。 \TeX Live に同梱されている Perl と Ghostscript は完全版ではなく、またシステムに別途インストールされたものとは一切干渉しません。

PS_View PostScript/PDF ビューア (図 12)。

dviout DVI ビューア。初期状態では、ファイルを `dviout` でプレビューしようとする、フォント生成が行われるはずですが、これはスクリーンフォントがインストールされていないためです。しばらく使用していると、頻繁に利用されるフォントの生成が完了するため、フォント生成ウィンドウが現れることは稀になります。詳細はオンラインヘルプ (おすす) を参照してください。

\TeX works PDF ビューア機能をもつ \TeX 用の統合開発環境。

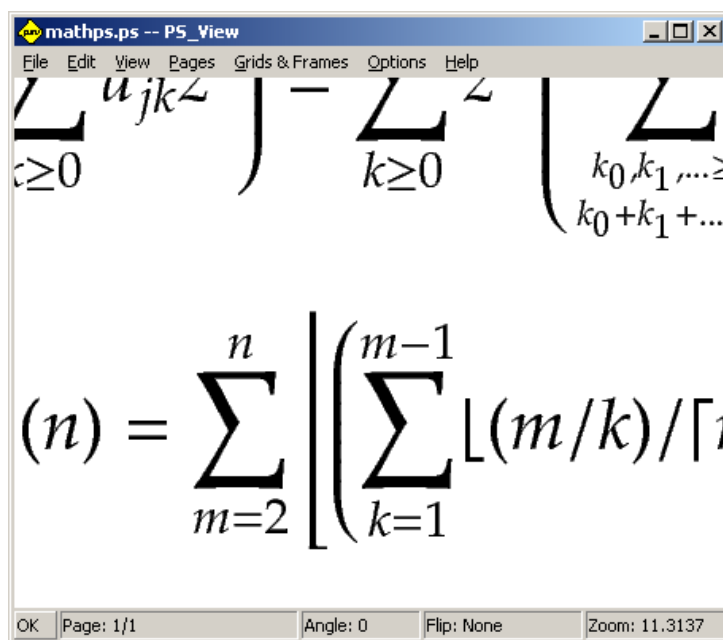


図 12 PS_View: かなり高い倍率まで拡大することができます。

各種コマンドラインツール \TeX Live バイナリと同時に、多数の Windows 移植版の UNIX コマンドもインストールされます。gzip, zip, unzip や poppler 関連の pdffinfo, pdffonts などです。Windows 版 \TeX Live にはスタンドアロンな PDF ビューアは含まれていません。必要に応じて Sumatra PDF viewer (<https://sumatrapdfreader.org/>) などをインストールしてください。

fc-list, fc-cache, ... これらのフォント管理ライブラリを利用して \TeX から Windows 上のフォントを利用できます。fc-list を用いると \TeX 拡張の \font コマンドに与えるべきフォント名を決定することができます。必要に応じて fc-cache を事前に実行してフォント情報を更新してください。

6.3 ユーザプロフィールがホームディレクトリ扱い

Windows において、UNIX のホームディレクトリに相当するのは %USERPROFILE% ディレクトリです。Windows Vista 以降の Windows では、そのデフォルト値は C:\Users\<username> です。texmf.cnf 内および Kpathsea 全般において、~ は Windows と UNIX のいずれにおいても適切に展開されます。

6.4 レジストリ

Windows ではほとんどすべての設定データはレジストリに保存されます。レジストリには数個のルートの下に階層的に構成されたキーが多数含まれています。簡単に言うと、インストールプログラムにとって最も重要なものは HKEY_CURRENT_USER, HKEY_LOCAL_MACHINE, HKCU, HKLM です。レジストリのキー HKCU はユーザのホームディレクトリ内を参照します (6.3 節を参照)。HKLM は通常 Windows ディレクトリ内のサブディレクトリです。

一部の項目については環境変数によってシステム情報を引き渡すことができますが、ショートカットの位置

などはレジストリを変更しないことには設定を反映することができません。また環境変数の値を恒久的に変更するのにもレジストリを編集する必要があります。

6.5 パーミッション

最近のバージョンの Windows では、管理者のみに OS 全体へのアクセス権があり、一般ユーザにはありません。T_EX Live は管理者権限がなくてもインストール可能なように工夫されています。

管理者権限でインストーラが実行されているときは、全ユーザ向けにインストールを行うためのオプションが利用可能です。このオプションを選択した場合、全ユーザ向けにショートカットが作成され、またシステムの検索パスも変更されます。逆に、このオプションを選択しなかった場合はショートカットとメニュー項目はインストーラを実行したユーザ向けにのみ作成され、そのユーザの検索パスだけが更新されます。

管理者として実行するか否かに関わらず、インストーラは常にデフォルトの T_EX Live ルートを %System-Drive% 以下に設定します。インストーラは、必ず設定しようとしているルート位置が現在の実行権限で書き込み可能かどうか確認します。

検索パスに T_EX が存在する状態で、一般ユーザとして T_EX Live のインストールを実行しようとする問題が発生します。システムの検索パスはユーザの検索パスよりも優先されるので、この状況で T_EX Live をインストールしても優先的に利用されることはありません。安全策として、インストーラは新しくインストールされた T_EX Live バイナリのディレクトリがローカル検索パスの先頭にくるようコマンドプロンプトにショートカットを作成します。そのため、この安全策が有効なコマンドプロンプトからは常に新しい T_EX Live が利用可能です。T_EXworks がインストールされている場合、その検索パスについても T_EX Live が先頭にくるよう設定されるため、同様に検索パスの問題は回避されるはずです。

Windows では管理者アカウントにログインしていても、明示的に管理者権限としての実行を指示する必要があります。実際に、管理者アカウントにログインするだけではあまり意味がありません。肝心なのは、プログラムやショートカットを右クリックし「管理者として実行」を選択することです。

6.6 Windows と Cygwin でメモリ上限を増やす方法

Windows と Cygwin (Cygwin インストールの詳細については 3.1.4 節を参照してください) では、T_EX Live に含まれるいくつかのプログラムがメモリを使い果たす場合があります。例えば asy で 25,000,000 リールの配列を確保しようとしたり、LuaT_EX で多書体組を行おうとしたりするとメモリが不足する可能性があります。

Cygwin ではユーザマニュアル (<https://www.cygwin.com/cygwin-ug-net/setup-maxmem.html>) の説明に従うことによってメモリ上限を増やすことができます。

Windows の場合はいくつかの手順を行う必要があります。まず moremem.reg というファイルに以下の内容を書き込みます：

```
Windows Registry Editor Version 5.00
```

```
[HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Cygwin]
"heap_chunk_in_mb"=dword:ffffff00
```

その上で、管理者権限で regedit /s moremem.reg を実行してください。(もしシステム全体ではなく、現

在利用中のユーザのみについてメモリ上限を変更したい場合は `HKEY_CURRENT_USER` を使用してください。)

7 Web2C ユーザガイド

Web2C は \TeX 関連プログラムのコレクションです。これにはオリジナルの \TeX そのものに加えて METAFONT, METAPOST, Bib \TeX などが含まれており、 \TeX Live の心臓部と言えます。最新版のマニュアルやその他の情報はウェブサイト (<https://tug.org/web2c>) に掲載されています。

少し Web2C の歴史的経緯について触れておきます。Web2C のオリジナル作者は Tomas Rokicki で 1987 年に最初の \TeX -to-C システムを開発しました。このシステムは Howard Trickey と Pavel Curtis による UNIX 下の changefile をベースにしていました。その後 Tim Morgan がこのシステムのメンテナとなり、その期間システムは Web-to-C と呼ばれていました。1990 年に Karl Berry が多くの協力者の助けを得ながらメンテナンスを引き継ぎました。1997 年に Olaf Weber がメンテナになりましたが、2006 年には再び Karl Berry の管理下に戻りました。

Web2C システムは UNIX, 32-bit Windows, macOS などの OS で動作します。このシステムでは Knuth による \TeX のオリジナルソースと、文芸的プログラミングシステム WEB で書かれたいくつかの基本的なプログラムを使用し、それらを C 言語ソースコードに変換します。このような方法で管理されている \TeX 関連のプログラムは以下の通りです：

bibtex 参考文献の管理
dvcopy DVI ファイルで参照されている仮想フォントの展開
dvitomp DVI を MPX (METAPOST 画像) に変換
dvitype DVI を可読テキストに変換
gftodvi Generic fonts (GF) の見本 (DVI) 作成
gftopk GF を packed fonts (PK) に変換
gftype GF を可読テキストに変換
mf フォントファミリの作成
mft METAFONT ソースを \TeX ファイルに変換
mpost 図形描画
patgen ハイフンパターンを作成
pktogf PK を GF に変換
pktype PK を可読テキストに変換
pltotf プレーンテキストのプロパティリストを TFM に変換
pooltype WEB プールファイルを表示
tangle WEB を Pascal に変換
tex 組版システム
tftopl TFM をプレーンテキストのプロパティリストに変換
vftovp 仮想フォントを仮想プロパティリストに変換
vptovf 仮想プロパティリストを仮想フォントに変換
weave WEB を \TeX ファイルに変換

各プログラムの正確な機能やシンタックスについては、それぞれのマニュアルや Web2C 自体のドキュメント

に記載されています。しかしながら、すべてのプログラムに共通するいくつかの基本事項を押さえておくことで Web2C をインストールする際に役立ちます。

Web2C に含まれるすべてのプログラムは、以下の標準的な GNU オプションをサポートしています：

```
--help  基本的な使用方法を表示
--verbose  より詳細な実行メッセージを表示
--version バージョン情報を表示して終了
```

Web2C プログラムはファイル探索に Kpathsea ライブラリ (<https://tug.org/kpathsea>) を使用します。このライブラリは環境変数と設定ファイルの両方を参照して膨大な量の T_EX 関連ファイルの検索を最適化します。Web2C は多くの TEXMF ツリーを同時に参照でき、このことが TDS を維持したままローカルシステム全体またはユーザごとの拡張を異なるツリーに分離するのに役立ちます。ファイル検索を高速化するため、各ツリーのルートには配下にあるすべてのファイルの名前と相対位置を列挙した `ls-R` ファイルが置かれています。

7.1 Kpathsea パス検索

まずはじめに、Kpathsea ライブラリによるパス検索の一般的なメカニズムを紹介します。

パス要素（基本的にはディレクトリ名）をコロンまたはセミコロン区切りで並べたリストを**検索パス**と呼びます。検索パスはさまざまな場所で設定可能です。例えば、`'my-file'` を検索パス `':/dir'` から見つける場合、Kpathsea は各パス要素を順番に確認します。この場合、まず `./my-file` を確認し、次に `/dir/my-file` を確認して最初にみつけたもの（状況によっては、見つけたものすべて）を返します。

あらゆる OS に適切に対応するため、非 UNIX システムにおいては Kpathsea はコロン（`:`）とスラッシュ（`/`）以外の記号をファイル名の区切り文字として扱うことができます。

特定のパス要素 p を確認する際、Kpathsea はまず利用可能なファイル名データベース（7.2 節）が p について用意されているかを調べます。すなわち、 p のプレフィックスにあたるディレクトリにデータベースがあるかを調べ、もし存在していた場合はその内容に基づいて検索マッチングを行います。

最もシンプルでよくあるパス要素はディレクトリ名ですが、Kpathsea はそれ以外の機能として階層的なビルトイン値、環境変数名、設定ファイルの値、ユーザのホームディレクトリ、そしてサブディレクトリの再帰的な検索などをサポートしています。すなわち、Kpathsea はパス要素を種々の指定に従って通常のディレクトリ名に展開します。これ以降、この展開について実際に処理が行われる順番で説明していきます。

ところで、ファイル名が絶対パスもしくは明示的な相対パス（すなわち `'/'`、 `'./'`、 `'../'` のいずれかから始まるもの）で検索された場合は Kpathsea は、単純にそのパス位置にファイルがあるか否かを確認します。

7.1.1 パスの設定元

検索パスは設定ファイルや環境変数など、さまざまな場所で設定することができます。ここにすべての設定元を Kpathsea が使用する順番に列挙しておきます：

1. ユーザが設定している `TEXINPUTS` などの環境変数。なお `'<変数名>.<プログラム名>'` という形の環境変数は、環境変数 `'<変数名>'` を上書きします。例えば `'latex'` が実行中のプログラム名である場合、`TEXINPUTS.latex` は `TEXINPUTS` を上書きします。

2. プログラムごとの設定ファイル。例えば dvips の設定ファイル config.ps 内にある ‘S /a:/b’ のような記述が反映されます。
3. Kpathsea の設定ファイル texmf.cnf。‘TEXINPUTS=/c:/d’ のような設定が並んでいます。
4. コンパイル時のデフォルト設定。

それぞれの変数の値が何に設定されているかは、デバッグオプションを使用すると確認することができます (p. 43 の「デバッグアクション」項を参照)。

7.1.2 設定ファイル

Kpathsea は texmf.cnf という名前の実行時設定ファイルを読み込み、検索パスやその他の設定を行います。この設定ファイルの検索には検索パス TEXMFCNF が使用されますが、この変数の内容を変更したりシステムディレクトリを上書きするように環境変数の値を設定することは推奨されません。

代わりに、通常のインストールを行うと .../2019/texmf.cnf が生成されます。どうしてもデフォルト設定を変更する必要がある場合は (通常は必要ありません)、このファイルに変更を加えてください。メインの設定ファイルは .../2019/texmf-dist/web2c/texmf.cnf です。このファイルを変更してもディストリビューション側でアップデートがあると変更内容が失われてしまうため、ユーザはこのファイルを編集すべきではありません。

余談ですが、もし単に個人用のディレクトリを特定の検索パスに入れたいという場合は環境変数を設定するのが合理的です：

```
TEXINPUTS=./my/macro/dir:
```

設定をメンテナンスしやすく、また何年にも渡って使えるようにするためには、すべての要素を明示的に記入するのではなく、末尾に ‘:’ (Windows では ‘;’) を置いてシステムのパスが挿入されるようにしましょう (7.1.4 節を参照)。また、他にも TEXMFHOME ツリーを利用する方法もあります (3.2.3 節を参照)。

Kpathsea 検索パスに含まれるすべての texmf.cnf を読み込み、その内容を反映します。この際、検索パスのより前方にあるものの設定はより後方にあるものよりも優先されます。例えば、検索パス .:\$TEXMF の下で、./texmf.cnf は \$TEXMF/texmf.cnf の内容を上書きします。

- % はコメント開始文字で、行末までコメントとして扱われます。
- 空行は無視されます。
- 行末の \ は行継続文字としてはたります。すなわち、次の行の内容も同じ行として扱われます。行頭の連続する空白文字は無視されます。
- ほかの行は次の形式で記述されます：

```
⟨変数名⟩[.⟨プログラム名⟩] [=] ⟨値⟩
```

なお ‘=’ とその前後の空白は省略可能です (ただし ⟨値⟩ が ‘.’ で始まる場合は、ピリオドがプログラム修飾子と解釈されないよう ‘=’ を書いた方が無難です)。

- ⟨変数名⟩ には空白文字、‘=’, ‘.’ 以外の任意の文字を含めることができますが ‘A-Za-z_’ の範囲に留めておくのが無難です。
- もし変数名に ‘.⟨プログラム名⟩’ が付いている場合は、その変数定義は ⟨プログラム名⟩ または ⟨プログラム名⟩.exe という名前のプログラムの実行中のみで適用されます。この機能を用いると、例えば T_EX

処理系の種類ごとに異なる検索パスを適用することができます。

- 〈値〉には ‘%’ と ‘@’ を除く任意の文字を含めることができます。\$〈変数〉.〈プログラム名〉という形の変数は、右辺では使うことができません。そのような場合は、必ず別の変数を追加して使用してください。〈値〉内の ‘;’ は UNIX 環境下では ‘:’ に置換されます。この機能は 1 つの texmf.cnf を UNIX, MS-DOS, Windows で共有するのに便利です。
- すべての定義は展開される前に読み込まれるので、定義前の変数も右辺に含めることが可能です。

上記の仕様のほとんどを活用した設定ファイルの例を示しておきます：

```
TEXMF          = {$TEXMFLOCAL,!!$TEXMFMAIN}
TEXINPUTS.latex = .;$TEXMF/tex/{latex,generic;}//
TEXINPUTS.fontinst = .;$TEXMF/tex//;$TEXMF/fonts/afm//
% e-TeX related files
TEXINPUTS.elatex = .;$TEXMF/{etex,tex}/{latex,generic;}//
TEXINPUTS.etex   = .;$TEXMF/{etex,tex}/{eplain,plain,generic;}//
```

7.1.3 パス展開

Kpathsea は UNIX シェルと同様にいくつかの特殊文字や検索パスの構造を認識します。一般の例として、複雑なパス \$USER/{foo,bar}//baz は \$USER のホームディレクトリ直下のディレクトリ foo と bar 以下にある、baz という名前のファイルまたはディレクトリを含むすべてのサブディレクトリに展開されます。これらのパス展開の詳細については以下のセクションを参照してください。

7.1.4 デフォルト展開

最も優先度の高い検索パス（7.1.1 節を参照）が先頭、末尾または途中 2 連続する形で追加コロンを含んでいる場合、Kpathsea はその位置に（もし定義されていれば）次に優先度の高いパスを挿入します。もし挿入される次点の検索パスにも追加コロンが含まれている場合、さらに次に優先度の高いパスが挿入されていきます。例えば

```
> setenv TEXINPUTS /home/karl:
```

のように環境変数が設定されていたとして、texmf.cnf で設定されている TEXINPUTS の値が

```
.: $TEXMF//tex
```

のとき、最終的に検索されるパスは次のようになります：

```
/home/karl:.: $TEXMF//tex
```

デフォルト値を複数箇所に挿入しても意味がないので、Kpathsea は追加コロンを 1 つだけデフォルト値に置換し、それ以外はそのままにします。まず先頭にコロンがないか確認され、続いて末尾コロン、2 連続のコロンが順にチェックされます。

7.1.5 ブレース展開

ブレース展開は便利な機能で、例えば v{a,b}w は vaw:vbw に展開されます。ネストすることも可能です。この機能は \$TEXMF にブレースリストを与えることにより複数の \TeX ヒエラルキーを共存させるのにも利用されています。具体的には texmf.cnf では次のような設定が行われています（この例のために単純化してい

ます) :

```
TEXMF = {$TEXMFVAR,$TEXMFHOME,!!$TEXMFLOCAL,!!$TEXMFDIST}
```

この値は、例えば $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ の入力パスを定義するのに活用できるでしょう :

```
TEXINPUTS = .;$TEXMF/tex//
```

この設定の下では、まずカレントディレクトリがチェックされ、続いて $\$TEXMFVAR/tex$, $\$TEXMFHOME/tex$, $\$TEXMFLOCAL/tex$, $\$TEXMFDIST/tex$ ツリーが (最後 2 つについては `ls-R` データベースを利用しつつ) 検索されることになります。これにより “frozen” な TEXMF ツリー (例えば CD に入れてあるもの) と常に最新版にアップデートしている TEXMF ツリーを並行的に運用しているとして、 $\$TEXMF$ 変数をすべての定義に使用しておけば、常に最新の TEXMF ツリーを先に検索するようにすることができます。

7.1.6 サブディレクトリ展開

パス要素内で、2 つ以上の連続するスラッシュがディレクトリ名 d の後ろに置かれている場合、 d 以下のすべてのサブディレクトリに展開されます。つまり、まず d 直下のサブディレクトリが並び、続いてさらにそれらのサブディレクトリのサブディレクトリが並び、以降も再帰的に続きます。各階層でサブディレクトリがどのような順番で検索されるかは決まっています。

‘//’ に続いてファイル名の一部を置いた場合、それとマッチするファイルを含むサブディレクトリのみが展開結果に含められます。例えば ‘/a//b’ は /a/1/b, /a/2/b, /a/1/1/b などに展開されますが、/a/b/c や /a/1 には展開されません。

‘//’ を 1 つのパスに複数含めることは可能ですが、パスの先頭に置かれた ‘//’ は無視されます。

7.1.7 特殊文字の一覧 (要約)

以下のリストに Kpathsea 設定ファイルで利用できる特殊文字について要約しておきます :

- : パス設定の区切り文字。先頭や末尾に置かれた場合はデフォルトパス展開されます。
- ; 非 UNIX システムでの区切り文字 (挙動は : と同様)
- \$ 変数展開
- ~ ユーザのホームディレクトリを表す
- {...} ブレース展開
- // サブディレクトリ展開。先頭を除き、パス中どこでも利用可能
- % コメントの開始
- \ 行継続 (複数行エントリの記述に使用)
- !! ファイル名データベースの使用を強制 (ディスク検索を禁止)

7.2 ファイル名データベース

Kpathsea は検索のためのディスクアクセスをある程度軽減する仕組みを持っています。それでも、十分な大きさの $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ インストール構成で指定されたファイルについて、それが存在する可能性のあるすべてのディレクトリを検索するとかなり長い時間がかかってしまいます (特に何百ものフォントディレクトリを探索する

場合には顕著です). そのため Kpathsea は `ls-R` という名前のプレインテキスト「データベース」にファイルとディレクトリの情報を予め書き込んでおき、過剰なディスクアクセスを回避しています.

また `aliases` というもう 1 つのデータベースファイルを利用すると, `ls-R` に含まれているファイル名に別名 (エイリアス) を付けることができます. この機能は, ソースファイルに含まれている DOS 8.3 形式のファイル名を確認する際に便利です.

7.2.1 ファイル名データベース

上で説明したように, メインのファイル名データベースの名前は `ls-R` です. ファイル名データベースは, 検索対象としたい各 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ ヒエラルキーの最上位階層に配置することができます (デフォルトでは $\text{\$TEXMF}$). Kpathsea は TEXMFDBS パスに含まれている `ls-R` を読み込みます.

`ls-R` の生成・更新には, ディストリビューションに含まれる `mktexlsr` コマンドの利用をおすすめします. このコマンドは種々の `mktex...` スクリプトから呼び出されます. 本質的には, このスクリプトは単に

```
cd /your/texmf/root && \ls -lLAR ./ >ls-R
```

を実行するだけです. なお, このスクリプトはシステムの `ls` コマンドが正しい形式で出力を行うことを前提にしています (GNU `ls` なら問題ありません). データベースが常に最新の状態であることを保証するには, `cron` を利用して定期的にデータベースを更新するのが簡単でしょう. そうすることによって, 例えば $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ パッケージをインストールしたりアップデートしたりして, 新しいファイルが配置されたとしても自動的にデータベースが更新されることになります.

データベースにファイルが見つからない場合, デフォルトでは Kpathsea は処理を続行してディスク検索を行います. ただし '!' から開始するパス要素については, データベースの**み**が検索され, ディスクが検索されることはありません.

7.2.2 kpsewhich: パス検索用コマンドラインツール

`kpsewhich` コマンドはパス検索を行うための独立したツールです. このコマンドは `find` コマンドのように利用して $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ ヒエラルキーの中にあるファイルを探索するのに便利です (このプログラムはディストリビューションに含まれる `mktex...` スクリプトでも多用されています).

```
> kpsewhich <オプション>... <ファイル名>...
```

上記の <オプション> は '-' または '--' で開始して, 曖昧でない限りどのような省略の仕方をしても指定可能です.

Kpathsea はオプションでないすべての引数をファイル名として受け取って, それぞれについて見つかった最初のファイルを返します. 特定の名前のファイルをすべて列挙するオプションはありません (そのような場合は UNIX の `find` コマンドを使用してください).

よく使われるオプションを一覧にしておきます:

`--dpi=<数値>` 解像度を <数値> に設定します. このオプションは generic fonts (GF) と packed fonts (PK) を検索するときのみ効果を発揮します. `dvips` に合わせて `-D` という省略形も使用できます. デフォルト値は 600 です.

`--format=<フォーマット名>` 検索対象のフォーマットを指定します. デフォルトではフォーマットはファイ

ル名から推測されます。METAPOST のサポートファイルや dvips の設定ファイルなど、対応する（曖昧でない）拡張子がないフォーマットについては、このオプションを用いて明示的に指定する必要があります。その際〈フォーマット名〉には `tex` や `enc files` などを指定します。具体的なフォーマット名のリストについては `kpsewhich --help` を参照してください。

`--mode=〈モード名〉` モード名を設定します。このオプションも GF および PK の検索用です。デフォルト値はなく、指定しない限りすべてのモードが検索対象になります。

`--must-exist` ディスク検索を含むあらゆる手段を使用して、可能な限りファイル検索を行います。デフォルトでは、効率重視のため `ls-R` データベースのみが検索されます。

`--path=〈パス〉` ファイル名からパスを推測する代わりに、指定された〈パス〉（通常通りコロン区切り）を利用して検索を行います。‘`//`’を含むすべての特殊文字とその展開がサポートされています。`--path` と `--format` は相容れません。

`--programe=〈プログラム名〉` プログラム名を設定します。これは `.〈プログラム名〉` 接尾辞付きの変数を介して検索パスに影響を与えます。デフォルトでは `kpsewhich` です。

`--show-path=〈名前〉` 指定した〈名前〉と紐づくファイルタイプの検索に用いられるパスを表示します。〈名前〉には拡張子（`.pk`, `.vf`, etc.）またはファイル名を指定することができ、`--format` オプションも併用できます。

`--debug=〈数値〉` デバッグレベルを〈数値〉に設定します。

7.2.3 使用例

このセクションでは Kpathsea の実行例をいくつか紹介していきます。まずは単純な検索です：

```
> kpsewhich article.cls
/usr/local/texmf-dist/tex/latex/base/article.cls
```

この例では `article.cls` を検索しています。拡張子 `.cls` には曖昧性がないので、わざわざファイルタイプ `tex` ($\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ のソースファイル) を指定する必要はありません。上の例では、目的のファイルは `texmf-dist` $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live ディレクトリ内の `tex/latex/base` サブディレクトリの中に見つかりました。同様に、以下に列挙する例はいずれも曖昧性のない拡張子のおかげで特に問題なくファイルを見つけることができます：

```
> kpsewhich array.sty
/usr/local/texmf-dist/tex/latex/tools/array.sty
> kpsewhich latin1.def
/usr/local/texmf-dist/tex/latex/base/latin1.def
> kpsewhich size10.clo
/usr/local/texmf-dist/tex/latex/base/size10.clo
> kpsewhich small2e.tex
/usr/local/texmf-dist/tex/latex/base/small2e.tex
> kpsewhich tugboat.bib
/usr/local/texmf-dist/bibtex/bib/beebe/tugboat.bib
```

ところで、最後の例として挙がっているのは *TUGboat* の記事用の Bib $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 文献データベースです。

```
> kpsewhich cmr10.pk
```

拡張子‘.pk’をもつ、フォントのビットマップグリフファイルは dvips や xdvi などのディスプレイプログラムによって使用されます。Computer Modern の‘.pk’ファイルは通常 T_EX Live に含まれていないので（デフォルトでは Type 1 変種が使用されるため）、上の例では何も出力されません。

```
> kpsewhich wsuipa10.pk
/usr/local/texmf-var/fonts/pk/ljfour/public/wsuipa/wsuipa10.600pk
```

これらのフォント（ワシントン大学で開発された音声記号）については、まず‘.pk’ファイルを作成する必要があります。T_EX Live における METAFONT モードはデフォルトでは解像度 600 dpi (dots per inch) 設定の ljfour なので、上のような結果になります。

```
> kpsewhich -dpi=300 wsuipa10.pk
```

続いてのケースでは解像度 300 dpi を指定 (--dpi=300) していますが、そのようなフォントファイルは存在しないという結果が得られました。dvips や xdvi などのプログラムは実行を中断し、mktexpk スクリプトを用いて必要な‘.pk’ファイルを作成することになるでしょう。

次に dvips のヘッダおよび設定ファイルについて考えましょう。2004 年以来、汎用の設定ファイル config.ps と PostScript フォントのマップファイル psfonts.map は独自の検索パスと texmf ツリー内での配置場所を持っているので、それらを取り扱う前に T_EX サポートのための汎用プロログ tex.pro の例を示しました。拡張子‘.ps’には曖昧性があるので、config.ps については該当するファイルタイプ (dvips config) を明示的に指定する必要があります。

```
> kpsewhich tex.pro
/usr/local/texmf/dvips/base/tex.pro
> kpsewhich --format="dvips config" config.ps
/usr/local/texmf/dvips/config/config.ps
> kpsewhich psfonts.map
/usr/local/texmf/fonts/map/dvips/updmap/psfonts.map
```

今度は URW Times の PostScript サポートファイルについて考えます。標準的なフォント命名規則に基づけば、これらのプレフィックスは‘utm’です。最初に検索するのはマップファイルの名前を格納している設定ファイルです：

```
> kpsewhich --format="dvips config" config.utm
/usr/local/texmf-dist/dvips/psnfss/config.utm
```

このファイルには

```
p +utm.map
```

という記述があり、utm.map を参照しているので、続いてこのファイルの位置を確認してみましょう：

```
> kpsewhich utm.map
/usr/local/texmf-dist/fonts/map/dvips/times/utm.map
```


このマップファイルは URW コレクションに含まれる Type 1 PostScript フォントのファイル名を定義しています。ファイルには下記のような記述が並んでいます（以下は抜粋です）：

```
utmb8r NimbusRomNo9L-Medi    ... <utmb8a.pfb
utmbi8r NimbusRomNo9L-MediItal... <utmbi8a.pfb
utmr8r NimbusRomNo9L-Regu    ... <utmr8a.pfb
utmri8r NimbusRomNo9L-ReguItal... <utmri8a.pfb
utmbo8r NimbusRomNo9L-Medi    ... <utmb8a.pfb
utmro8r NimbusRomNo9L-Regu    ... <utmr8a.pfb
```

例えば、Times Roman を例にとって、texmf ディレクトリ内における utmr8a.pfb ファイルの位置を検索してみます：

```
> kpsewhich utmr8a.pfb
/usr/local/texmf-dist/fonts/type1/urw/times/utmr8a.pfb
```

ここまでの例が、いかに簡単に指定したファイルを見つけることができるかを示しているはずですが、ここで示したテクニックは、何らかの理由で間違ったバージョンのファイルが使用されてしまっていると疑われるときに特に役立ちます。kpsewhich コマンドを用いれば、どのファイルが一番最初に見つかっているのかを確認することができます。

7.2.4 デバッグアクション

ときとして、あるプログラムがファイル参照をどのように解決しているかについて調査する必要がある場合があります。そのような場合のために、Kpathsea はさまざまなレベルのデバッグオプションを提供しています：

- 1 stat コマンドによるディスク検索の状況。きちんと更新された ls-R データベースを使用して検索が行われている場合、このデバッグオプションはほとんど何も出力しないはずです。
- 2 ハッシュテーブルの参照 (ls-R, マップファイル, 設定ファイルなど)。
- 4 ファイル I/O 操作。
- 8 各ファイルタイプに適用されるパスの情報。これは特定のファイルに対する検索パスがどこで定義されているのかを調べるのに役立ちます。
- 16 各パス要素に属するディレクトリの一覧 (ディスク検索にのみ関係)。
- 32 ファイル検索。
- 64 変数の値。

デバッグレベルを -1 に設定すると上のすべてが有効になります。多くの場合、実用上はこれが一番便利でしょう。

同様に dvips プログラムでも、デバッグオプションをいくつか組み合わせることでどこのファイルが読み込まれているか詳細を確認することができます。またファイルが見つからない場合に、デバッグ出力はプログラムがどこに対してファイル検索を行ったかを示してくれるので、どこに問題があるのかを把握することができます。

一般的に言って、Kpathsea ライブラリは多くのプログラムから内部的に呼び出されるものなので、デバッ

```

debug:start search(file=texmf.cnf, must_exist=1, find_all=1,
  path=./usr/local/bin/texlive:/usr/local/bin:
    /usr/local/bin/texmf/web2c:/usr/local:
    /usr/local/texmf/web2c/././teTeX/TeX/texmf/web2c:).
kdebug:start search(file=ls-R, must_exist=1, find_all=1,
  path=~/.tex:/usr/local/texmf).
kdebug:search(ls-R) =>/usr/local/texmf/ls-R
kdebug:start search(file=aliases, must_exist=1, find_all=1,
  path=~/.tex:/usr/local/texmf).
kdebug:search(aliases) => /usr/local/texmf/aliases
kdebug:start search(file=config.ps, must_exist=0, find_all=0,
  path=~/.tex:!!/usr/local/texmf/dvips/).
kdebug:search(config.ps) => /usr/local/texmf/dvips/config/config.ps
kdebug:start search(file=/root/.dvipsrc, must_exist=0, find_all=0,
  path=~/.tex:!!/usr/local/texmf/dvips/).
search(file=/home/goossens/.dvipsrc, must_exist=1, find_all=0,
  path=~/.tex/dvips//:!!/usr/local/texmf/dvips/).
kdebug:search($HOME/.dvipsrc) =>
kdebug:start search(file=config.cms, must_exist=0, find_all=0,
  path=~/.tex/dvips//:!!/usr/local/texmf/dvips/).
kdebug:search(config.cms)
=>/usr/local/texmf/dvips/cms/config.cms

```

図 13 設定ファイルを見つける

グオプシオンは環境変数 `KPATHSEA_DEBUG` を上記リストの値（もしくはそれらの組み合わせ）に設定することによって指定するのがよいでしょう。^{*1}

例として、以下のような内容の小さな \LaTeX ソースファイル `hello-world.tex` を考えてみます。

```

\documentclass{article}
\begin{document}
Hello World!
\end{document}

```

この小さなファイルは `cmr10` フォントのみを使用するのですが、`dvips` がどのように PostScript ファイルを用意するのか確認してみましょう（ここでは Computer Modern の Type 1 バージョンを使用したいので `-Pcms` を指定します）。

```
> dvips -d4100 hello-world -Pcms -o
```

上記の例では `dvips` のデバッグクラス 4（フォントパス）と `Kpathsea` のパス要素展開を組み合わせました（`dvips` のリファレンスマニュアルを参照）。この出力（かなりいじっていますが）を図 13 に示します。`dvips` は起動後、まず作業ファイルを探します。はじめに他のファイルの検索に用いられる検索パスを定義する `texmf.cnf` が見つかり、続いてファイル検索を最適化するファイル名データベース `ls-R` とエイリアスを

^{*1} Windows ユーザ向けの情報：Windows ではすべてのデバッグメッセージを 1 つのファイルにリダイレクトするのは困難です。デバッグの際は、一時的に `SET KPATHSEA_DEBUG_OUTPUT=err.log` などと設定するのがよいでしょう。

定義している `aliases` が見つかります。dvips はさらに汎用の設定ファイル `config.ps` やカスタマイズ設定を記述する `.dvipsrc` を探し出します（上の例では、後者は “not found” という結果になっています）。最後に dvips は Computer Modern の PostScript フォント用の設定ファイル `config.cms` を探します（これは `-Pcms` の効果です）。このファイルには T_EX 間の関係を定義するマップファイルのリストが記述されています。

```
> more /usr/local/texmf/dvips/cms/config.cms
p +ams.map
p +cms.map
p +cmbkm.map
p +amsbkm.map
```

dvips はこのようにしてすべてのファイルを見つけ、さらに常に使用されることになっている汎用マップファイル `psfonts.map` も読み込みます（このファイルではすべての PostScript フォントに共通する定義が行われています。PostScript マップファイルの取り扱いの詳細については 7.2.3 節の最後の部分を参照してください）。

ここにきて、dvips はやっとプログラム自身の情報をユーザに提示します：

```
This is dvips(k) 5.92b Copyright 2002 Radical Eye Software (www.radicleye.com)
```

その後プロローグファイルが検索されます：

```
kdebug:start search(file=texc.pro, must_exist=0, find_all=0,
  path=.:~/tex/dvips/./:/usr/local/texmf/dvips/./:
    ~/tex/fonts/type1/./:/usr/local/texmf/fonts/type1/./).
kdebug:search(texc.pro) => /usr/local/texmf/dvips/base/texc.pro
```

以上で必要なファイルが揃ったので、dvips は日付と時刻を出力し、そして `hello-world.ps` というファイルが生成されることを予告します。合わせて、そのファイル生成の際にはフォントファイル `cmr10` が必要であることと、そのフォントが “resident”（ビットマップ不要）として扱われる旨が表示されます。

```
TeX output 1998.02.26:1204' -> hello-world.ps
Defining font () cmr10 at 10.0pt
Font cmr10 <CMR10> is resident.
```

これでやっと `cmr10.tfm` の検索が行われ、それが見つければ、もういくつかのプロローグファイルが参照され（出力には出ていません）、最終的に Type 1 のフォント実体 `cmr10.pfb` が出力ファイルに含まれることになります（最終行）。

```
kdebug:start search(file=cmr10.tfm, must_exist=1, find_all=0,
  path=.:~/tex/fonts/tfm/./:/usr/local/texmf/fonts/tfm/./:
    /var/tex/fonts/tfm/./).
kdebug:search(cmr10.tfm) => /usr/local/texmf/fonts/tfm/public/cm/cmr10.tfm
kdebug:start search(file=texps.pro, must_exist=0, find_all=0,
  ...
<texps.pro>
kdebug:start search(file=cmr10.pfb, must_exist=0, find_all=0,
```

```
path=.:~/tex/dvips/./:!!/usr/local/texmf/dvips/./:
    ~/tex/fonts/type1/./:!!/usr/local/texmf/fonts/type1/./).
kdebug:search(cmr10.pfb) => /usr/local/texmf/fonts/type1/public/cm/cmr10.pfb
<cmr10.pfb>[1]
```

7.3 ランタイムオプション

その他の Web2C の便利な機能として、数々のメモリパラメータ（例えば配列サイズ）を Kpathsea が読み込む設定ファイル `texmf.cnf` でコントロールできることが挙げられます。メモリ設定は $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live ディストリビューションに含まれる `texmf.cnf` の Part 3 に記述されています。より重要なことは：

main_memory $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$, METAFONT, METAPOST に使用を許可する合計のメモリ量（ワード数）。これらの設定を反映するには、値を適用した上でそれぞれのフォーマットを生成する必要があります。例えば、もし「巨大な」バージョンの $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ を生成したとして、それを利用するにはフォーマットファイル `hugetex.fmt` を呼び出す必要があります。

extra_mem_bot 「大きな」 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ のデータ構造（ボックス、グルー、ブレイクポイントなど）を配置するための追加領域。特に $\mathrm{P}_{\mathrm{T}}\mathrm{E}_{\mathrm{X}}$ を使用する際に便利です。

font_mem_size フォント情報を格納するために使用するメモリ量（ワード数）。これは読み込まれる TFM ファイルの合計サイズと概ね一致します。

hash_extra 制御綴を格納するハッシュテーブルのための追加領域。デフォルトでは、わずか 10,000 個程度の制御綴しかメインのハッシュテーブルに格納することができません。これでは多くの相互参照を含む大きな本の組版には不十分でしょう。hash_extra のデフォルト値は 50000 です。

もちろん、こうしたパラメータの存在は動的な配列・メモリ確保の完全な代替となるものではありません。しかし、そうした変更を現在の $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ ソースに対して適用するのは容易でないので、これらの実行時パラメータの存在はある程度の柔軟性をもたせる実用上の妥協策です。

8 謝辞

$\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live は事実上すべての $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ ユーザ会の貢献に支えられています。現在の $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live 監修者は Karl Berry です。過去から現在に至るまでの、その他の主要な貢献者は以下の通りです（敬称略）：

- 英語圏、ドイツ、オランダ、ポーランドの $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ ユーザ会（それぞれ TUG, DANTE e.V., NTG, GUST）。技術的・経営的なインフラの提供してくれました。ぜひお近くの $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ ユーザ会に加入してください！（<https://tug.org/usergroups.html> を参照）
- CTAN チーム（<https://ctan.org>）。 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live イメージを配布し、 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live が依存する各種のパッケージアップデートを行うための共通基盤の提供をしてくれています。
- Nelson Beebe. $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live 開発陣に数々のプラットフォームを提供し、彼自身も多くの包括的なテストを行ってくれました。また彼の比類なき書誌学的な貢献にも敬意を表します。
- John Bowman. 彼の高度なグラフィックツール Asymptote を $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live に対応させるため数多くの変更を加えてくれました。
- Peter Breitenlohner と ε - $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ チーム. 将来の $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ のために安定した基盤を構築してくれました。特

に Peter 氏は、長年に渡って GNU autotools 関連のヘルパーとして活躍し、ソースコードを最新の状態に保ってくれました。Peter、2015 年 10 月に亡くなりましたが、私たちは彼のことを忘れません。

- Jin-Hwan Cho とすべての DVIPDFM x チームメンバー。素晴らしいドライバを開発し、設定周りの諸問題に対する責任ある対応をしてくれました。
- Thomas Esser. 彼の素晴らしい teTeX パッケージなしには TeX Live は存在し得ませんでした。
- Michel Goossens. この文書のオリジナル版の共著者です。
- Eitan Gurari. 彼の TeX4ht は TeX Live 公式ドキュメントの HTML 版生成に利用されています。彼は急な依頼をしても、毎年快く TeX4ht の改善に取り組んでくれました。Eitan は 2009 年 6 月に若くして亡くなりましたが、私たちは彼のことを忘れません。
- Hans Hagen. 多くのテストを引き受け、また彼の ConTeXt パッケージ (<http://pragma-ade.com>) を TeX Live フレームワークに対応させてくれました。
- Hàn Thế Thành, Martin Schröder と pdfTeX チーム (<https://tug.org/applications/pdftex/>). 彼らは TeX を継続的に拡張してくれています。
- Hartmut Henkel. pdfTeX, LuaTeX をはじめ多くのプロジェクトに顕著な貢献をしてくれました。
- Taco Hoekwater. METAPOST と (Lua)TeX(<https://luatex.org>) 自体に対して大きな変更を施したほか、ConTeXt の TeX Live 対応や Kpathsea のマルチスレッド機能、その他数々の貢献をしてくれました。
- Khaled Hosny. XeTeX, DVIPDFM x に加え、アラビア語用のものを含め多くのフォントに対して多くの貢献をしてくれました。
- Paweł Jackowski. Windows 用インストーラ tlp pm , Tomasz Łuczak 氏は tlp $mgui$ を開発してくれました。これらのプログラムは過去の TeX Live で使用されていました。
- 角藤亮. 日本語 TeX 用の W32TeX ディストリビューション (<http://w32tex.org>) のために Windows バイナリを提供し、さらに開発に関わる数々の貢献をしてくれました。
- Jonathan Kew. 優れた TeX エンジンである XeTeX を開発し、時間と労力を割いてその処理系を TeX Live に導入してくれました。彼はさらに初期バージョンの MacTeX を開発し、我々のおすすめするフロントエンドである TeXworks も開発しました。
- Dick Koch. TeX Live チームと友好的かつ緊密に連携しながら MacTeX (<https://tug.org/mactex>) のメンテナンスを行ってくれています。
- Reinhard Kotucha. TeX Live 2008 のインフラとインストーラに対する主要な貢献者で、さらに Windows 研究や getnonfreefonts スクリプトの開発などに多大な努力をしてくれています。
- Siep Kroonenberg. 彼も TeX Live 2008 のインフラとインストーラの（特に Windows について）主要貢献者で、その新機能について解説するためマニュアルを大幅に改定してくれました。
- Mojca Miklavec. ConTeXt 開発の重要な協力者で、多くのバイナリビルドを行い、その他にも多くの仕事を行ってくれています。
- Heiko Oberdiek. epstopdf をはじめ数々のパッケージを開発し、巨大だった pst-geo データファイルを圧縮して TeX Live に含められるようにしてくれました。そして何より、彼の hyperref パッケージについての偉業に敬意を表します。
- Petr Olšák. チェコ・スロバキア関連のプロダクトを統括し、注意深くチェックしてくれました。
- 大島利雄. Windows 向け DVI ビューア dviout を開発してくれました。
- Manuel Pégourié-Gonnard. パッケージアップデートとドキュメントの改善に協力してくれたほか、

`texdoc` コマンドを開発しました。

- Fabrice Popineau. はじめて $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live の Windows サポートを行い、またフランス語ドキュメントに貢献してくれました。
- Norbert Preining. 現在の $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live インフラとインストーラの主要開発者で、Frank Küster と共に $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live の Debian パッケージを用意してくれています。彼は現在も広範に $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live に関わるさまざまな仕事を引き受けてくれています。
- Sebastian Rahtz. $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live の創始者で、長年そのメンテナンスを行っていました。彼は 2016 年 3 月に亡くなりましたが、私たちは彼のことを忘れません。
- Luigi Scarso. METAPOST, Lua $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ その他のプログラムを継続的に開発してくれています。
- Tomasz Trzeciak. Windows について広範な協力をしてくれました。
- Vladimir Volovich. さまざまなプログラムの $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live への組み込みとメンテナンスのために多くの手伝いをしてくれました。特に xindy の組み込みが実現したのは彼のおかげです。
- Staszek Wawrykiewicz. $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live 全体についての主要なテスターで、ポーランド語に関わる多くの貢献（フォントや Windows インストールなど）をしてくれました。Staszek 氏は 2018 年 2 月に亡くなりましたが、私たちは彼のことを忘れません。
- Olaf Weber. 過去何年にも渡って辛抱強く Web2C のメンテナンスを行ってくれました。
- Gerben Wierda. 初期の macOS サポートの開発とメンテナンスを行ってくれました。
- Graham Williams. $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カタログの創始者です。

バイナリのビルド担当者: Marc Baudoin (amd64-netbsd, i386-netbsd), Ken Brown (i386-cygwin, x86_64-cygwin), Simon Dales (armhf-linux), Johannes Hielscher (aarch64-linux), 角藤亮 (win32), Dick Koch (x86_64-darwin), Nikola Lečić (amd64-freebsd, i386-freebsd), Henri Menke (x86_64-linuxmusl), Mojca Miklavc (i386-linux, x86_64-darwinlegacy, i386-solaris, x86_64-solaris, sparc-solaris), Norbert Preining (x86_64-linux). $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live のビルドプロセスについては <https://tug.org/texlive/build.html> を参照してください。

このマニュアルの翻訳者: Denis Bitouzé, Patrick Bideault (フランス語), Carlos Enriquez Figueras (スペイン語), Jjgod Jiang, Jinsong Zhao, Yue Wang, Helin Gai (中国語), Nikola Lečić (セルビア語), Marco Pallante, Carla Maggi (イタリア語), Petr Sojka, Jan Busa (チェコ・スロバキア語), Boris Veytsman (ロシア語), Zofia Walczak (ポーランド語), Uwe Ziegenhagen (ドイツ語). $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live のドキュメントウェブページは <https://tug.org/texlive/doc.html> です。

もちろん、最も重要な謝辞は Donald Knuth に対して贈られるべきです。まず $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ を発明してくれたこと、そしてそれを世界に広めてくれたことについて、深く感謝します。

9 更新履歴

9.1 過去

最初に議論が始まったのはオランダ $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ ユーザ会が 4All $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ CD を MS-DOS ユーザのために用意し始めたときのことでした。そのときは、すべてのシステムに向けて 1 つの合理的な CD を作成することが望ましいとされました。これは、当時あまりに漠然とした目標でしたが、結果的には 4All $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ CD を完成させたのみならず $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ ディレクトリ構造 (TDS, <https://tug.org/tds>) についての作業チームを TUG に発足さ

せることにつながりました。作業チームはどのようにすれば一貫性があり、管理の容易な T_EX サポートファイルのコレクションを作成できるか議論を重ねました。TDS についての完全な原稿は 1995 年 12 月発行の *TUGboat* に掲載されましたが、かなり早い段階から望ましい成果物は CD 上のモデル構造であることは明らかでした。いま皆さんにとってお馴染みのディストリビューションは、この作業チームの議論のかなり直接的な成果と言えます。また 4AllT_EX CD の成功から、同様の簡単なシステムを作れば UNIX ユーザも恩恵に与ることができることも明らかで、この事実も T_EX Live にもう 1 つの大きな流れを作りました。

私たちは、1995 年の秋にまず UNIX ベースの TDS CD の開発に取り掛かり、すぐに Thomas Esser の teT_EX が理想的なディストリビューションであることがわかりました。teT_EX はすでに複数のプラットフォームをサポートしており、さまざまなファイルシステムに対応するように設計されていました。Thomas 氏の協力を得て活動は 1996 年のはじめに本格化し、最初のバージョンが 1996 年の 5 月にリリースされました。1997 年の頭に Karl Berry が大規模な修正を加えた新しいバージョンの Web2C をリリースし、Thomas 氏が teT_EX に加えていたほとんどすべての機能が利用可能になりました。この Web2C に teT_EX の texconfig スクリプトを加えたものはバージョン 2 のベースに採用されることが決まりました。バージョン 3 は Olaf Weber によってさらに大きく修正された Web2C 7.2 をベースにしました。同時に、新しいバージョンの teT_EX も開発され、T_EX Live もすぐにそのほとんどの新機能を取り込みました。バージョン 4 も同じパターンでのリリースとなり、新しい teT_EX と新しい Web2C 7.3 を利用して作成されました。Fabrice Popineau の貢献もあり、この時点までに T_EX Live は完全な Windows サポートを完成させていました。

バージョン 5 (2000 年 3 月) では多くの部分が改修・チェックされ、何百ものパッケージがアップデートされました。パッケージの詳細は XML ファイルに保存されるようになりました。一方で T_EX Live 5 における大きな変更として、すべての有償ソフトウェアは取り除かれました。このときから T_EX Live に含まれるすべてのものは Debian フリーソフトウェアガイドライン (<https://www.debian.org/intro/free>) 互換であることが求められるようになりました。私たちはすべてのパッケージのライセンスを確認するよう最善を尽くしましたが、もし何か間違いがあればご連絡ください。

バージョン 6 (2001 年 7 月) にはさらに多くのパッケージアップデートが取り込まれました。このバージョンで最大の更新点はインストールについての新しい選択肢です。ユーザはより詳細に必要なコレクションを選択できるようになりました。特定の言語と関連するコレクションが大きく見直され、そうしたコレクションを選択すれば対応するマクロやフォントがインストールされるだけでなく、適切な language.dat も用意されるようになりました。

2002 年のバージョン 7 での大きな変更としては Mac OS X サポートの追加と、例年通り無数のパッケージやプログラムのアップデートが挙げられます。このときの大きな目標はソースコードを teT_EX のそれと統合し、バージョン 5, 6 間の不整合を修正することでした。

9.1.1 2003

2003 年も例年通り数多くのアップデートと追加パッケージがあり T_EX Live は巨大化してもはや 1 枚の CD に収まらないことがわかりました。そのため、私たちはこれを 3 つの異なるディストリビューションに分離しました (2.1 節 (p. 7) を参照)。その他の変更点：

- L^AT_EX チームからのリクエストを受けて、標準設定における latex, pdflatex コマンドが ϵ -T_EX エンジンを使用するように変更 (p. 9 参照)
- 新しい Latin Modern フォントを追加 (そして推奨)

- Alpha OSF のサポートを終了 (HPUX のサポートは既に終了していました)。これは新しいバイナリをコンパイルするためのハードウェアを誰も所有していなかった (そして新しい有志も現れなかった) ためです。
- Windows サポートの大きな変更。XEmacs ベースの統合環境が始めて導入されました。
- Windows 向けの重要な追加プログラム (Perl, Ghostscript, ImageMagic, Ispell) が \TeX Live のディレクトリにインストールされるようになりました。
- dvips, dvipdfm, pdftex などによって使用されるフォントマップファイルが新しい updmap によって生成され、texmf/fonts/map に配置されるようになりました。
- \TeX , METAFONT, METAPOST がデフォルトでほとんどの入力文字 (文字コード 32 以上) をそのままファイル (例えば `\write` の出力先)、ログファイル、ターミナルに出力するようになりました。すなわち `^^` 表現への変換が行われないようになりました。 \TeX Live 7 では、この変換はシステムのロケール設定に依存していました。今後はロケール設定は \TeX のコアプログラムの挙動に影響を与えなくなります。もし何らかの理由により `^^` 表現による出力が必要な場合は texmf/web2c/cp8bit.tcx のファイル名を変更してください。(将来的にはもう少し簡単な方法を用意する予定です。)
- このドキュメントを全面的に改訂しました。
- 最後に、バージョン番号が大きくなってきたので、今後は単にリリース年で表すことにしました。すなわち今回のバージョンは \TeX Live 2003 となります。

9.1.2 2004

2004 年には数多くの更新がありました：

- ローカルにインストールしたフォントで、独自の .map や (あまりないと思いますが) .enc を利用するものがある場合、それらのサポートファイルを移動する必要があります。
 .map ファイルについては TEXFONTMAPS パスに含まれる (各 TEXMF ツリーの) fonts/map 以下のサブディレクトリのみが検索されるようになりました。同様に .enc ファイルについても ENCFONTS パスに含まれる fonts/enc 以下のサブディレクトリのみが検索対象になりました。しばらくの間は updmap コマンドが将来的に問題となり得るファイルについて警告を出します。
 より詳細な対策その他の情報については <https://tug.org/texlive/mapenc.html> を参照してください。
- \TeX コレクションに MiK \TeX ベースのインストール CD が追加されました。MiK \TeX 実装の Web2C がお好みの場合はそちらをお使いください。詳細は 2 節 (p. 6) を参照。
- 従前のリリースにおいて、 \TeX Live における唯一の巨大な TEXMF ツリーであった texmf を texmf, texmf-dist, texmf-doc の 3 つに分割しました。詳細は 2.2 節 (p. 7) と各ツリーの README を参照してください。
- すべての \TeX 関連の入力ファイルを各 texmf* ツリーの tex サブディレクトリに集約しました (これまでは tex, etex, pdftex, pdfetex 等々に分けられていました)。詳細は texmf-dist/doc/generic/tds/tds.html#Extensions を参照してください。
- (ユーザによって直接実行するためのものではない) 補助スクリプトを各 texmf* ツリーの scripts サブディレクトリに移動し、kpsewhich --format=texmfscripts で探せるようにしました。こうした補助スクリプトを呼び出すプログラムについては改修の必要があります。詳細は texmf-dist/doc/

`generic/tds/tds.html#Scripts` を参照してください。

- `cp227.tcx` の設定により、ほとんどすべてのフォーマットで大半の文字を ^^ 表現へ変換することなくそのまま出力するようになりました。特に文字コード 32–256 の文字とタブ、垂直タブ、改ページは印字可能文字として扱い変換されません。例外は plain $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ (32–126 のみ印字可能), Con $\text{T}_{\text{E}}\text{Xt}$ (0–256 を印字可能) と Ω 関連フォーマットです。デフォルトの挙動は $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ Live 2003 とほとんど変わりませんが、実装が整理されカスタマイズも容易になりました。詳細は `texmf-dist/doc/web2c/web2c.html#TCX-files` を確認してください。(ところで Unicode 入力については $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ はエラーを表示して部分的な文字シーケンスを出力する可能性があります。これは $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ がバイト指向であるためです。)
- `pdfetex` が (plain) `tex` を除くすべてのフォーマットのデフォルトエンジンになりました (もちろん, `latex` 等で実行された場合は DVI を出力します)。つまり, $\epsilon\text{-T}_{\text{E}}\text{X}$ 拡張 (`texmf-dist/doc/etex/base/`) に加えて `pdfT_{\text{E}}\text{X}` の microtypography 機能も $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ や Con $\text{T}_{\text{E}}\text{Xt}$ で利用可能になります。
- この変更は `ifpdf` (plain $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ でも $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ でも使用可) または同等のコードの利用がこれまで以上に重要となったということを意味します。なぜなら単純に `\pdfoutput` (または他のプリミティブ) が定義されているかどうかを調べるだけでは PDF 出力が行われているかどうかを判定できなくなったからです。この後方互換性について今年のリリースでは可能な限り対処しましたが、来年以降は DVI 出力を行っているときであっても `\pdfoutput` が定義されている可能性があります。
- `pdfT_{\text{E}}\text{X}` (<https://tug.org/applications/pdftex/>) には多くの新機能が追加されました:
 - `\pdfmapfile` と `\pdfmapline` がドキュメント内からのフォントマップアクセスをサポートします。
 - Microtypographic フォント展開がより簡単に利用できるようになりました。
<https://www.ntg.nl/pipermail/ntg-pdftex/2004-May/000504.html>
 - 従来は専用の設定ファイル `pdftex.cfg` で設定していたパラメータは、今後プリミティブを用いて設定されなければなりません。具体的には `pdftexconfig.tex` で設定されています。 `pdftex.cfg` はもはやサポートされません。 `pdftexconfig.tex` が変更された場合、すべての `.fmt` ファイルを再生成する必要があります。
 - その他の更新点については `pdfT_{\text{E}}\text{X}` のマニュアルを参照してください: `texmf-dist/doc/pdftex/manual/pdftex-a.pdf`
- `tex` (および `mf` と `mpost`) の `\input` プリミティブがダブルクオートで囲うことによって空白やその他の特殊文字を含む入力を受け付けるようになりました。典型的な使用例:


```
\input "filename with spaces"    % plain
\input{"filename with spaces"}    % latex
```

 詳細については Web2C のマニュアルを参照してください `texmf-dist/doc/web2c`。
- Web2C に `encT_{\text{E}}\text{X}` サポートが追加され、この機能は結果的にすべての $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ プログラムで `-enc` オプションを通して利用可能になりました (ただしフォーマットが生成されている場合に限る)。 `encT_{\text{E}}\text{X}` は入出力の再エンコーディングについて汎用的なサポートを提供するもので、Unicode (UTF-8 形式による) のフルサポートを可能としています。詳細については `texmf-dist/doc/generic/encctex/` と <http://www.olsak.net/encctex.html> を参照してください。
- $\epsilon\text{-T}_{\text{E}}\text{X}$ と Ω を組み合わせた新エンジン \aleph が利用可能になりました。 `texmf-dist/doc/aleph/base` と <http://www.tex.ac.uk/cgi-bin/texfaq2html?label=aleph> にいくつかの情報が 있습니다。 \aleph における $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ ベースのフォーマットは `lamed` といいます。

- 最新の L^AT_EX は新しいバージョンの LPPL の下でインストールされました。これで公式に Debian 公認のライセンスになりました。他のアップデートについての情報と合わせて `texmf-dist/doc/latex/base` の `ltnews` ファイルに詳細が記載されています。
- DVI を PNG 画像ファイルに変換する新しいプログラム `dvipng` が追加されました。 <https://ctan.org/pkg/dvipng> を参照。
- medium サイズのフォント向けに `cbgreek` パッケージを導入しました。これはフォント作者 (Claudio Beccari) の同意と助言に基づくものです。除外されているフォントは不可視・アウトライン・透過文字です。これらは比較的使用頻度の低いもので、私たちは容量を気にする必要がありました。フルセットのフォントはもちろん CTAN から入手できます (<http://mirror.ctan.org/tex-archive/fonts/greek/cbfonts>)。
- `oxdvi` は廃止されました。 `xdvi` を使用してください。
- `initex` など `tex`, `mf`, `mpost` の `ini`, `vir` 版コマンド (リンク) は作成されなくなりました。 `ini` の機能は何年も前からコマンドラインオプション `-ini` を通して利用可能です。
- `i386-openbsd` プラットフォームのサポートは廃止されました。BSD ポートシステム向けの `tetex` パッケージと GNU/Linux および FreeBSD バイナリが利用可能なので、ビルド担当のボランティアは他のことに時間と労力を割いた方が良いでしょう。
- (少なくとも) `sparc-solaris` においては `tlutils` を実行するには環境変数 `LD_LIBRARY_PATH` を設定する必要があります。なぜなら、このプログラムは C++ によってコンパイルされていますが、それらについて実行時ライブラリの標準的な配置位置が存在しないためです (これは今に始まったことではありませんが、これまでドキュメント化されていませんでした)。同様に `mips-irix` においても、MIPSpro 7.4 ランタイムが必要です。

9.1.3 2005

2005 年も例年通り膨大なパッケージとプログラムのアップデートがありました。前年と比べるとインフラは安定していますが、必然的にいくつかの変更がありました：

- システムツリーの設定を変更する新しいスクリプト `texconfig-sys`, `updmap-sys`, `fmtutil-sys` が導入されました。 `texconfig`, `updmap`, `fmtutil` スクリプトは `$HOME/.texlive2005` 以下のユーザ設定を変更するようになりました。
- 上の変更に対応して、設定ファイルを探すべき TEXMF ツリーを指定する新しい環境変数 `TEXMFCONFIG` と `TEXMFSYSCONFIG` (それぞれユーザ用とシステム用) が追加されました。したがって個人用の `fmtutil.cnf` や `updmap.cfg` がある場合は、これらのパス内に移動する必要があります。もしくは `texmf.cnf` を用いて `TEXMFCONFIG`, `TEXMFSYSCONFIG` の値を再定義する手もあります。いずれにしても、実際の設定ファイル位置と `TEXMFCONFIG`, `TEXMFSYSCONFIG` の指す位置は必ず一致していなければなりません。詳細は 2.3 節 (p. 8) を参照してください。
- 昨年は pdf_TE_X が使用されていたとしても、DVI 出力を行う場合には `\pdfoutput` 等のプリミティブが未定義になるよう後方互換性を維持していました。今年は、予告していたとおり、この後方互換性に対するケアは終了します。そのためもし `\ifx\pdfoutput\undefined` のようなコードを利用して PDF 出力か否かを判定している場合、修正が必要になります。この場合 `ifpdf` パッケージ (plain T_EX でも L^AT_EX でも使用可能です) を使用するか、そのしくみを真似するのがいいでしょう。

- 昨年、ほとんどのフォーマットで出力文字 (8-bit) がそのまま維持されるようになりました (前のセクションを参照してください)。新しい TCX ファイル `empty.tcx` を用いてより簡単に ^^ 表現を利用するかつての挙動に戻せるようになりました:

```
latex --translate-file=empty.tcx yourfile.tex
```

- DVI を PDF に変換するため、新しく `dvipdfmx` プログラムが追加されました。これは活発にメンテナンスされている `dvipdfm` の後継です (`dvipdfm` は今でも利用可能ですが、推奨はされません)。
- Adobe Acrobat Reader を再起動することなく PDF のリロードを可能にする `pdfopen` と `pdfclose` が追加されました (`xpdf`, `gv`, `gsview` など Acrobat 以外の PDF リーダにはそもそもこのような問題はありませんでした)。
- 一貫性のため `HOMETEXMF` と `VARTEXMF` はそれぞれ `TEXMFHOME` と `TEXMFSYSVAR` に変更されました。ユーザごとのツリーを示す `TEXMFVAR` もデフォルトで存在していることに注意してください。このリストの最初の項目も再度確認してください。

9.1.4 2006–2007

2006–2007 年における $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live への大きな出来事は $\mathrm{X}_{\mathrm{E}}\mathrm{L}_{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ の追加でした。このプログラムは `xetex` と `xelatex` として利用可能です (<https://scripts.sil.org/xetex> 参照)。

`pdf $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$` (<https://tug.org/applications/pdftex>) と同様に、`METAPOST` にも将来的な拡張の計画も含めて特筆すべきアップデートがありました <https://tug.org/metapost/articles>。

$\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ の `.fmt` (高速フォーマット) と `METAPOST`, `METAFONT` 用の同等ファイルは `texmf/web2c` 直下から同サブディレクトリに移されました (一方で `texmf/web2c` 直下も既存の `.fmt` ファイルのために検索対象に残っています)。それらのサブディレクトリにはそれぞれのエンジン名 (`tex`, `pdftex`, `xetex` 等) が付けられています。通常の使い方をしていない限り、この変更による影響はないはずです。

(plain) `tex` コマンドは先頭行の `%&` (使用フォーマットの指定に使用する) を解釈しなくなりました。`tex` コマンドは純粋な Knuthian $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ です。(La $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ など他のコマンドは今後も `%&` を解釈します。)

当然のことながら、この期間にも (いつも通り) 上記以外に何百ものパッケージやプログラムのアップデートがありました。平常通り、それらについては CTAN (<http://mirror.ctan.org>) を確認してください。

内部的には、ソースツリーを Subversion で管理するようになり、その標準 Web インターフェースでソースツリーを閲覧できるようになりました ($\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live のウェブサイトからリンクされています)。この変更は最終的な配布版には関係ありませんが、この変更によって今後の開発基盤が安定すると期待しています。

最後に、2006 年 5 月に Thomas Esser が `te $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$` の更新を終了することを発表しました (<https://tug.org/tetex>)。結果として、特に GNU/Linux のディストリビュータから、にわかに $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live が注目されることになりました。 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live には新しく `tetex` スキームが追加され、これを用いると旧来の `te $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$` と概ね同等のものをインストールすることができます。私たちは、早晩この変化が全世界の人々の $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 環境の改善につながることを願っています。

9.1.5 2008

今年は $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live のインフラが全面的に再設計・再実装されました。インストールについての完全な情報は `tlpkg/texlive.tlpldb` というテキストファイルに保存されるようになりました。インフラ刷新による変化は色々ありますが、これによって一度インストールした $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ Live をインターネットを利用してアップグレード

できるようになりました。この機能は MiKTeX には何年も前からあったものです。今後は CTAN で新しいパッケージがリリースされる度にアップデートを行うことができますはずです。

大きな出来事として、新しいエンジン LuaTeX (<https://luatex.org>) が追加されました。このエンジンは組版にさらなる柔軟性を与えるだけでなく、 TeX 文書の内外で利用できる素晴らしいスクリプト言語の処理系を提供してくれます。

Windows と UNIX ベースプラットフォームのサポートがより統一的になりました。具体的には、 TeX Live に同梱されるようになった処理系によって Windows でも Perl スクリプトと Lua スクリプトが利用可能になりました。

新しい tlmgr スクリプトは (5 節) は TeX Live の初期インストール後の管理を行う汎用インターフェースです。このコマンドはパッケージアップデートと継続的なフォーマット・マップファイル・言語ファイル等の再生成を行います (オプションで、ローカルに追加されたものについても行います)。 tlmgr が開発されたので、これまでフォーマットやハイフネーション設定ファイルを管理していた texconfig は廃止されました。

また新しい索引作成支援プログラム xindy (<http://xindy.sourceforge.net/>) がほとんどのプラットフォーム向けに提供されるようになりました。

kpsewhich コマンドは与えられたファイルについて、すべてのマッチを返すことができるようになりました (オプション `--all`)。特定のサブディレクトリ内のマッチだけを返すことも可能です (オプション `--subdir`)。

extractbb コマンドという形で、 dvipdfmx プログラムにバウンディングボックス情報を抽出する機能が追加されました。これにより dvipdfm が持っていたほとんどの機能が dvipdfmx にも実装されたことになります。

Times-Roman や Helvetica のようなフォントエイリアスは削除されました。パッケージごとにそうしたエイリアスに求める挙動が異なり (例えば、期待されるエンコーディングが異なるなど)、またそれに対する良い解決策も存在しないためです。

ポーランド語向けの platex フォーマットは、まったく別の日本語用プログラム platex と名前が衝突しているため削除されました。代わりに、今後は polski パッケージが主としてポーランド語サポートを提供します。

内部的には、アップデートの簡便性のため、WEB の文字列プールファイルをバイナリにコンパイルするようになりました。

最後に、‘ $\text{TeX tuneup of 2008}$ ’ に述べられている Donald Knuth による変更が今回のリリースに反映されました。詳細は <https://tug.org/TUGboat/Articles/tb29-2/tb92knut.pdf> を参照してください。

9.1.6 2009

2009 年、 LuaTeX の OpenType サポート等を活用するため Lua(La)TeX のデフォルトの出力フォーマットが PDF に変更されました。新しいコマンド名 dviluatex と dvilualatex を使用すると DVI 出力の LuaTeX を実行できます。 LuaTeX のウェブサイトは <https://luatex.org> です。

Ω (Omega) 開発者らとの協議の後、オリジナルの Ω エンジンと Λ (Lambda) フォーマットは削除されることになりました。後継である \aleph (Aleph) と λ (Lamed) は Ω の機能を担うため今後も TeX Live に残ります。

Computer Modern を含め、新しいバージョンの AMS Type 1 フォントが追加されました。何年も前に Knuth が METAFONT のソース修正を行って変更されたいくつかのシェイプがついに反映され、またヒンティングも更新されました。Euler フォントも Hermann Zapf によって大幅に再デザインされました (<https://tug.org/TUGboat/Articles/tb29-2/tb92hagen-euler.pdf> 参照)。いずれについてもメトリ

クスは変更されていません。AMS フォントのウェブサイトは <https://www.ams.org/tex/amsfonts.html> です。

新しい GUI フロントエンド T_EXworks が Windows と MacT_EX 向けに追加されました。他のプラットフォーム向けのものや詳細情報については T_EXworks のウェブサイト (<https://tug.org/texworks>) を参照してください。T_EXworks は macOS 向けの統合開発環境 T_EXShop にインスパイアされたクロスプラットフォームなフロントエンドで、使い勝手の良さに重きを置いています。

製図用ツール Asymptote が多くのプラットフォーム向けに追加されました。これはテキストベースのグラフィックス記述言語で、大雑把には METAPOST と似たものですが、高度な 3D サポートその他の機能が利用可能です。ウェブサイトは <http://asymptote.sourceforge.net> です。

独立した dvipdfm コマンドは dvipdfmx に置き換えられました（ただし特別な互換モードで実行されます）。dvipdfmx は CJK サポートと、dvipdfm の最後のリリースから何年にも渡って蓄積された数多くの修正が含まれています。

新しいプラットフォーム (cygwin, i386-netbsd) 向けのバイナリが追加されました。ただし OpenBSD ユーザは標準的なパッケージシステムを用いて T_EX をインストールすることが推奨されます。複数のバージョンの OpenBSD で動作するバイナリを作成するのは困難でした。

その他の雑多な変更：

- lzma の安定した代替として xz 圧縮 (<https://tukaani.org/xz/>) を採用しました。
- 後続の文字列が定義済みの変数と一致しない限り '\$' をファイル名に使用できるようになりました。
- Kpathsea ライブラリがマルチスレッド化されました (METAPOST で使用されています)。
- T_EX Live 全体のビルドが Automake ベースになりました。

最後に過去のバージョンに関することについて告知します。T_EX Live のすべてのリリースは <ftp://tug.org/historic/systems/texlive> から入手できます (CD ラベル等のおまけもあります)。

9.1.7 2010

2010 年、出力 PDF のデフォルトバージョンが 1.5 になり、これまで以上の圧縮が可能になりました。この変更は PDF を出力するすべての T_EX エンジンと dvipdfmx について適用されました。L^AT_EX パッケージ pdf14 を使用するか `\pdfminorversion=4` を設定すると PDF 1.4 出力に戻すことができます。

pdf(L^A)T_EX は L^AT_EX の `graphics.cfg` が読み込まれていて、PDF 出力を行っている場合、`epstopdf` を用いて自動的にインクルードされた Encapsulated PostScript (EPS) ファイルを PDF に変換するようになりました。デフォルトのオプションは既存の PDF ファイルが上書きによって失われてしまうことのないように設定されていますが、`\documentclass` よりも前に `\newcommand{\DoNotLoadEpstopdf}{} (\def` を用いてもよい) を記述して読み込み済みのように見せかけることで `epstopdf` 使用を回避できます。また `pst-pdf` パッケージを使用した場合も読み込みは行われません。詳細については `epstopdf` パッケージのドキュメントを参照してください (<https://ctan.org/pkg/epstopdf-pkg>)。

関連する変更として、今年からいくつかの定められた外部コマンドが T_EX から (`\write18` 機能を介して) デフォルトで実行できるようになりました。デフォルトで実行が許可されているコマンドは `repstopdf`, `makeindex`, `kpsewhich`, `bibtex`, `bibtex8` です。このリストは `texmf.cnf` に定義されています。こうした外部コマンドをすべて禁止する必要がある環境では、インストーラにオプションを指定するか (3.2.4 節を参照), `tlmgr conf texmf shell_escape 0` を実行して設定を上書きしてください。

上とは別の関連する変更は BibTeX と Makeindex が任意ディレクトリのファイル出力を (TeX 本体と同様) デフォルトでは行わなくなったことです。これは、これらのプログラムを制限付き `\write18` で実行できるようにするための措置です。この挙動を変更するためには環境変数 `TEXMFOUTPUT` を設定するか `openout_any` 設定を変更してください。

X_gTeX が pdfTeX と同様に同じ行内でのマージンカーニングをサポートするようになりました (フォント展開は今のところサポートされていません)。

tlmgr がデフォルトで各パッケージのバックアップを取るようになったので (tlmgr option autobackup 1), パッケージアップデート時に不具合が発生しても tlmgr restore により簡単に復元できるようになりました。もしインストール後のアップデートを行いたいもののバックアップ用のディスク容量がないという場合は tlmgr option autobackup 0 を実行してください。

新規に追加されたプログラム:

- pTeX エンジンと関連する日本語組版のためのユーティリティ
- BibTeXU: Unicode サポートが有効な BibTeX
- chktex: (L^A)TeX 文書をチェックするツール
- dvisvgm: DVI を SVG に変換するツール (<http://dvisvgm.sourceforge.net>)

新しいプラットフォーム向けの実行バイナリも追加されました: amd64-freebsd, amd64-kfreebsd, i386-freebsd, i386-kfreebsd, x86_64-darwin, x86_64-solaris。

TeX Live 2009 の変更ですが、昨年リリースノートに書き忘れたものがありました。TeX4ht 関連の多くの実行バイナリ (<https://tug.org/tex4ht>) がバイナリ用ディレクトリから削除されました。汎用の mk4ht コマンドを用いてすべての tex4ht コンビネーションを実行することができます。

最後に、TeX コレクション DVD 上の TeX Live はライブ実行できなくなりました。1 枚の DVD だけではもはや十分なスペースが確保できないためです。有用な副作用として、物理 DVD からのインストールがこれまでよりかなり高速になりました。

9.1.8 2011

macOS バイナリ (universal-darwin, x86_64-darwin) の動作要件が Leopard 以降になりました。今後 Panther と Tiger はサポート対象外となります。

一般的なプラットフォーム向けに文献処理ツール biber が追加されました。このプログラムの開発は L^ATeX の参考文献関連機能の完全な再実装である biblatex パッケージの開発と緊密に連携しています。

METAPOST (mpost) は .mem ファイルを作成したり利用したりしなくなりました。plain.mp のような必要ファイルは実行の度に読み込まなければなりません。これは METAPOST をライブラリとして利用できるようにしたことに関連する変更です (ライブラリ利用可能になったこともまた顕著な変更ですが、一般のユーザにはあまり関係がありません)。

updmap の Perl 実装はこれまで Windows 専用でしたが、刷新されてすべてのプラットフォームで利用されるようになりました。これもユーザに影響のあるような変更ではないはずですが、実行速度はかなり向上しました。

initex, inifm コマンドが復活しました (ただし、その他の ini* コマンドは復活していません)。

9.1.9 2012

tlmgr が複数のネットワークレポジトリからのアップデートをサポートするようになりました。tlmgr help の出力の “multiple repositories” に関するセクションにはさらなる詳細が記述されています。

xetex, xelatex の双方について \XeTeXdashbreakstate のデフォルト値が 1 になりました。これにより em-ダッシュと en-ダッシュの直後の改行が許容されます（これは plain TeX, LaTeX, LuaTeX 等の挙動と同じです）。既存の XeTeX 文書で、これまでの行分割とまったく同じ挙動を必要とする場合は明示的に \XeTeXdashbreakstate を 0 に設定してください。

pdftex と dvips を含むいくつかのプログラムが生成するファイルが 2 GB を超えられるようになりました。

あまりにも多くのバリエーションが存在するため、35 の PostScript 標準フォントが dvips の出力にデフォルトで埋め込まれるようになりました。

制限付き \write18 実行モードにおいて、mpost がデフォルトで許可されるようになりました。

texmf.cnf が ../texmf-local の位置（例えば /usr/local/texlive/texmf-local/web2c/texmf.cnf）でも（存在すれば）みつけられるようになりました。

updmap スクリプトがグローバルな設定ではなくツリー毎に updmap.cfg を読み込むようになりました。この変更は、updmap.cfg を直接変更していない限りユーザへの影響はないはずです。詳細は updmap --help の出力を参照してください。

プラットフォーム：armel-linux と mipsel-linux が追加され、sparc-linux と i386-netbsd はもはやメインディストリビューションには含まないことになりました。

9.1.10 2013

ディストリビューション構造：トップレベルの texmf ディレクトリは、簡潔のため texmf-dist と統合されました。Kpathsea 変数 TEXMFMAIN と TEXMFDIST は今後ともに texmf-dist を参照することになります。

多くの小さな言語サポートコレクションは、インストールをシンプルにするため、統合されました。

METAPOST: PNG 出力のネイティブサポートと浮動小数点数 (IEEE double) が追加されました。

LuaTeX: 内蔵 Lua 処理系のバージョンが 5.2 に上がりました。また、外部 PDF のページコンテンツを処理など多くの機能をもつ pdfscanner ライブラリが新たに追加されました（詳細は pdfscanner のウェブサイトを参照してください）。

XeTeX（ウェブサイトにもさらに多くの情報があります）：

- フォントレイアウトに ICU に代わって HarfBuzz ライブラリを使用するようになりました（ICU も入力エンコーディング、双方向組版、オプションな Unicode 改行をサポートするために依然として利用されています）。
- グラファイトレイアウトには SilGraphite に代わって Graphite2 と HarfBuzz が利用されるようになりました。
- Mac では ATSUI（廃止予定）に代わって Core Text を使用するようになりました。
- 同名のものがある場合、Type1 フォントより TrueType/OpenType フォントが優先されるようになりました。
- 稀に XeTeX と xdvipdfmx でフォント検索の挙動に違いが生じる問題を修正しました。

- OpenType の math cut-ins をサポートしました。

xdvi: レンダリングに t1lib に代わって FreeType を使用するようになりました。

microtype: Xe_{La}TeX の protrusion 機能と Lua_{La}TeX の protrusion, フォント展開, トラッキング機能をサポートしたほか, 数々の拡張が行われました。

tlmgr: 新しく pinning アクションが追加され, 複数のレポジトリの管理が簡単になりました。
tlmgr --help 出力の該当セクションまたはオンライン <https://tug.org/texlive/doc/tlmgr.html#MULTIPLE-REPOSITORIES> に詳細が記述されています。

プラットフォーム: armhf-linux, mips-irix, i386-netbsd, amd64-netbsd が追加 (または復活) されました。
一方 powerpc-aix は廃止されました。

9.1.11 2014

2014 年も Knuth による T_EX のアップデートがありました。この変更はすべてのエンジンに影響しますが, ユーザから見える変化は起動時バナーの preloaded format の文字列ぐらいでしょう。Knuth によれば, 今回の変更により起動時バナーはバイナリに実際にアンダンプされて読み込まれたフォーマットよりも, 読み込まれていることが期待されるフォーマットを反映するようになりました。バナーの内容はさまざまな方法で書きされ得ます。

pdf_{La}TeX: 警告を抑制する新しいパラメタ \pdfsuppresswarningpagegroup と, PDF テキストリフローを補助するために単語内スペースを制御する新しいプリミティブ \pdfinterwordspaceon, \pdfinterwordspaceoff, \pdffakepace が追加されました。

Lua_{La}TeX: フォント読み込みとハイフネーションについて, 大きな変更と修正がありました。また lua_{jittex} (<http://foundry.supelec.fr/projects/luajittex>) という新しい変種エンジンが追加されました (さらに, このエンジンの仲間として texluajit, texluajitc も追加されています)。この処理系は Lua の JIT コンパイラを利用しています (詳細は TUGboat の記事 <https://tug.org/TUGboat/tb34-1/tb106scarso.pdf> にあります)。lua_{jittex} は現在開発途上にあり, すべてのプラットフォームで利用可能なわけではなく, また luatex ほど安定していない可能性があります。T_EX Live チームも lua_{jittex} 開発陣も, このエンジンは Lua コードの JIT コンパイルについて実験を行う場合を除いては, 使用を推奨していません。

Xe_{La}TeX: Mac を含むすべてのプラットフォームで同じ画像フォーマットをサポートするようになりました。Unicode の互換性分解フォールバックは回避されるようになりました (ただしそれ以外については未対応)。Xe_{La}TeX の以前のバージョンとの互換性のため, グラファイトフォントについては OpenType を優先します。

METAPOST: numberprecision に加えて, 新しい数値体系 decimal のサポートされるようになりました。Knuth により plain.mp の drawdot の定義が更新されました。SVG および PNG 出力についてのバグが修正されました。

T_EX Live 2014 リリース後どこかのタイミングで ConT_EXt のユーティリティ pstopdf は独立のコマンドとしては廃止される予定です。これは同名の OS ユーティリティとの衝突があるためです。同ユーティリティは mtxrun --script pstopdf によりこれからも呼び出すことができます。

psutils は新しいメンテナにより大きく修正されました。結果として, いくつかのあまり使われていないユーティリティ (fix*, getafm, psmerge, showchar) はユーザレベルバイナリとして提供するのではなく scripts ディレクトリ以下に移動されることになりました (もしこの変更で問題が発生した場合は戻されるかもしれません)。一方で新しいスクリプト psjoin が追加されました。

T_EX Live ベースのディストリビューション MacT_EX (3.1.2 節) は、今後 Latin Modern と T_EX Gyre フォントについての Mac 専用パッケージを同梱しないことになりました。これはユーザが各自でそれらのフォントをシステムで利用できるように設定するのはそれほど難しくないためです。また T_EX4ht (とりわけ `tex4ht.env`) が Ghostscript を直接利用するようになったので ImageMagick の `convert` コマンドも削除されました。

中国語、日本語、韓国語をサポートする langcjk コレクションは大きすぎたので言語ごとに独立のパッケージに分割されました。

プラットフォーム: x86_64-cygwin が追加された一方、mips-irix は削除されました。Microsoft が Windows XP のサポートを終了したので、T_EX Live も XP ではそのうち動作しなくなるでしょう。

9.1.12 2015

L^AT_EX 2_ε に元々は fixltx2e パッケージを読み込まない限りは適用されなかった変更がデフォルトで組み込まれるようになりました (逆に、今後は fixltx2e を読み込んでも何も起こりません)。新たに追加された latexrelease パッケージその他の新機構を用いて「どこまでの変更を反映するか」をコントロールすることができます。詳細は付属ドキュメントの “L^AT_EX News #22” や “L^AT_EX changes” に綴られています。ちなみに babel と psnfss は L^AT_EX の中核を成すパッケージながら開発・保守は独立に行われており、今回の変更とは関係がありません (これまで通り動作するはずです)。

内部的には L^AT_EX 2_ε 自身が Unicode 関連のエンジン設定 (カテゴリーコードの初期値など) を同梱するようになりました。こうした設定は以前は T_EX Live が提供していました。この変更はユーザには無関係のはずです。低レベルの内部コントロールシーケンスはリネームされたり削除されたりしていますが、全体としての挙動はこれまでと完全に一致しているはずです。

pdfT_EX: JFIF と同様 JPEG の Exif 情報もサポートするようになりました。 `\pdfinclusionerrorlevel` の値が負のときは警告を一切発しません。また xpdf 3.04 に対応しました。

LuaT_EX: トークン読み取りのための newtokenlib ライブラリが追加されました。normal な乱数生成やその他の部分に関わるバグ修正も含まれています。

X_YT_EX: 画像の取り扱いに関する修正がありました。xdvipdfmx バイナリは最初に xetex の仲間を検索するようになりました。XDV の内部オペコードが変更されました。

METAPOST: 新しい数値体系 binary が追加されました。up**tex* に対応する日本語用の upmpost, updvitomp プログラムが追加されました。

MacT_EX: CJK サポート Ghostscript パッケージの更新が反映されました。システム環境設定の “T_EX Distribution” ペインが OS X 10.10 Yosemite でも利用可能になりました。リソースフォークフォント (通常拡張子なし) はもはや X_YT_EX ではサポートされなくなりました。一方データフォークフォント (.dfont) は今後もサポートされます。

インフラ: fmtutil スクリプトが updmap と同様、ツリー毎に fmtutil.cnf を読み込むように再実装されました。Web2C の mktex* スクリプト (mktexlsr, mktextfm, mktexpk など) は毎回 PATH にあるプログラムよりも、それぞれと同じディレクトリにあるプログラムを優先するようになりました。

プラットフォーム: kfreebsd 系のプラットフォームサポートは終了しました。これらのプラットフォームでは、それぞれシステムネイティブな機能を利用して簡単に T_EX Live を導入できるようになったためです。いくつかの追加プラットフォームがカスタムバイナリの形でサポートされるようになりました (<https://tug.org/texlive/custom-bin.html>)。加えていくつかのプラットフォームサポートが DVD で

は省略されるようになりましたが（単純に容量不足のためです）、インターネット経由でこれまで通りインストールすることができます。

9.1.13 2016

LuaTeX: プリミティブについての大きな変更（リネームと削除）とノード構造の部分的な再設計がありました。この変更は Hans Hagen 氏による記事 “LuaTeX 0.90 backend changes for PDF and more” (<https://tug.org/TUGboat/tb37-1/tb115hagen-pdf.pdf>) に要約されています。すべての詳細については LuaTeX のマニュアル `texmf-dist/doc/luatex/base/luatex.pdf` を参照してください。

METAFONT: METAFONT に Lua 処理系を組み込んだ実験的なプログラム MFlua と MFluajit が追加されました。現状これらは試用と実験のためのものです。

METAPOST: バグ修正と METAPOST 2.0 に向けた内部的準備が行われました。

LuaTeX とオリジナルの TeX を除くすべての処理系が `SOURCE_DATE_EPOCH` に対応しました（LuaTeX も次のリリース時に対応する予定です）。環境変数 `SOURCE_DATE_EPOCH` が設定されている場合、その値が PDF 出力のタイムスタンプとして利用されます。`SOURCE_DATE_EPOCH_TEX_PRIMITIVES` も設定されている場合、`SOURCE_DATE_EPOCH` の値が TeX のプリミティブ `\year`, `\month`, `\day`, `\time` の初期化にも利用されます。pdfTeX のマニュアルに詳細と使用例が記載されています。

pdfTeX: 通常実行の毎に異なる値の出力をコントロールするためのプリミティブ `\pdfinfoomitdate`, `\pdftrailerid`, `\pdfsuppressptexinfo` が追加されました。これらの機能は PDF 出力のためのもので、DVI のものではありません。

X_YTeX: プリミティブ `\XeTeXhyphenatablelength`, `\XeTeXgenerateactualtext`, `\XeTeXinterword-spaceshaping`, `\mdfivesum` が追加されました。文字クラスの上限が 4096 に制限されました。DVI の id バイトが更新されました。

その他のユーティリティ：

- **gregorio** はグレゴリオ聖歌楽譜を組版するためのパッケージ `gregoriotex` に含まれる新しいプログラムです。このツールは `shell_escape_commands` にデフォルトで含まれています。
- **upmendex** は索引作成プログラムで、概ね `makeindex` と互換なものですが、Unicode ソートをサポートする他、いくつかの変更が加えられています。
- **afm2tfm** はアクセントベースの高さ調整を上向きのみに行うようになりました。`-a` を使用するとすべての調整を省略します。
- **ps2pk** が拡張 PK/GF フォントを扱えるようになりました。

MacTeX: システム環境設定の “TeX Distribution” ペインが廃止され、そこで取り扱われていた機能は TeX Live ユーティリティに移されました。同梱の GUI アプリケーションはアップデートされました。さまざまな CJK フォントを Ghostscript で扱いたいユーザのために新しく `cjk-gs-integrate` スクリプトが追加されました。

インフラ: システムレベルの `tlmgr` 設定ファイルがサポートされました。またパッケージのチェックサムを認証する機能が追加されました。GPG が利用可能な場合はネットワークアップデート時に署名も認証されるようになります。これらの認証はインストーラと `tlmgr` の両方で行われます（GPG が利用できない場合、アップデートはこれまで通り処理されます）。

プラットフォーム: `alpha-linux` と `mipsel-linux` は削除されました。

9.1.14 2017

LuaTeX: コールバックや組版制御の機能が追加され、これまで以上に内部処理にアクセスできるようになりました。動的なコード読み込みを行うための `ffi` ライブラリがいくつかのプラットフォーム向けに追加されました。

pdfTeX: 昨年導入された環境変数 `SOURCE_DATE_EPOCH_TEX_PRIMITIVES` は `FORCE_SOURCE_DATE` にリネームされました（機能はまったく同一です）。トークンリスト `\pdfpageattr` が文字列 `/MediaBox` を含んでいる場合、デフォルト `/MediaBox` の出力が省略されるようになりました。

X_YTeX: Unicode/OpenType の math 機能は HarfBuzz の MATH テーブルサポートに基づくようになりました。またいくつかのバグが修正されました。

dvips: `dvipdfmx` との一貫性とのパッケージから期待される挙動に合わせるため、最後の用紙サイズ `special` が適用されるようになりました。 `-L0` オプションを使用（または設定ファイルで `L0` 指定）した場合、最初の `special` が優先される従来の挙動に戻ります。

ε-pTeX, **ε-upTeX**: pdfTeX 由来のプリミティブ `\pdfuniformdeviate`, `\pdfnormaldeviate`, `\pdf-randomseed`, `\pdfsetrandomseed`, `\pdfelapsedtime`, `\pdfresettimer` が追加されました。

MacTeX: 今年から、MacTeX としては Apple がセキュリティパッチを提供している macOS のバージョンのみをプラットフォーム `x86_64-darwin` としてサポートすることになりました。これにより、現在サポート対象となるのは Yosemite, El Capitan, Sierra（つまり macOS 10.10 以上）です。それよりも古いバージョンの macOS 向けのバイナリは MacTeX には同梱されていませんが、TeX Live には含まれています (`x86_64-darwinlegacy`, `i386-darwin`, `powerpc-darwin`)。

インフラ: `TEXMFLOCAL` がデフォルトで `TEXMFSYSCONFIG` および `TEXMFSYSVAR` に先んじて検索されるようになりました。これはローカルなファイルがシステムのそれを上書きするのがより期待される挙動であろうとの判断からです。また `tlmgr` に新しく `shell` モード（対話的実行もしくはスクリプトから使用されることを意図するものです）と `conf auxtrees` アクション（独自ツリーの追加と削除が容易にできます）が追加されました。

updmap と **fmtutil**: これらのスクリプトは明示的にいわゆるシステムモード (`updmap-sys`, `fmtutil-sys` コマンドの実行または `-sys` オプションの利用) またはユーザモード (`updmap-user`, `fmtutil-user` コマンドの実行または `-user` オプションの利用) を指定せずに実行された場合、警告を表示するようになりました。これは長年に渡って意図せずユーザモードでスクリプトが実行され、その後システム側のアップデートが反映されない問題へ対処するための措置です。詳細は <https://tug.org/texlive/scripts-sys-user.html> を参照してください。

install-tl: macOS における `TEXMFHOME` 等の個人用パスのデフォルト値が MacTeX のデフォルト値 `~/Library/...` に合わせられました。新しく `-init-from-profile` オプションが追加され、指定したプロファイルの値に基づいてインストールを開始できるようになったほか、明示的にプロファイルを保存する `P` コマンドが追加されました。またプロファイルで指定する変数の名前が更新されました（古い変数名も引き続き使用可能です）。

SyncTeX: 一時ファイルの名前が `foo.synctex.gz(busy)` のような形から `foo.synctex(busy)` に変更されました（`.gz` の部分が省略されます）。一時ファイルを削除するフロントエンドやビルドシステムは対応が必要かもしれません。

その他のユーティリティ: `texosquery-jre8` は新しいクロスプラットフォームなプログラムで、TeX 文書

の中からロケールその他の OS 情報を収集するためのものです。このツールは制限付きシェル実行時でも起動できるよう、デフォルトで `shell_escape_commands` に追加されています (texosquery は JRE の古いバージョンもサポートしていますが、古い JRE で実行する場合には制限モードでは実行できません。古い JRE は既に Oracle によってサポートされておらず、セキュリティ上の懸念があるためです)。

プラットフォーム：上の MacTeX の項目を確認してください。それ以外の変更はありません。

9.1.15 2018

Kpathsea: システムディレクトリ以外に対してはデフォルトで大文字・小文字を区別せずファイル検索を行うようになりました。これまで通り大文字・小文字を区別したい場合は `texmf.cnf` または環境変数で `texmf_casefold_search` を 0 に設定してください。詳細は Kpathsea のマニュアル (<https://tug.org/kpathsea>) を参照してください。

ε-pTeX, ε-upTeX: 新プリミティブ `\epTeXversion` が追加されました。

LuaTeX: TeX Live 2019 で Lua 5.3 に移行するための準備として、ほとんどのプラットフォーム向けにバイナリ `luatex53` が追加されました。有効化するためには `luatex` にリネームしてください。もしくは ConTeXt Garden (<https://wiki.contextgarden.net>) のファイルを使用してください (詳細はサイトを参照してください)。

METAPOST: 間違ったパス方向と TFM, PNG 出力に関する問題が修正されました。

pdfTeX: ビットマップフォントについてエンコーディングベクタが許容されるようになり、カレントディレクトリが PDF ID 中にハッシュされなくなりました。 `\pdfprimitive` とそれに関連するバグ修正が行われました。

X_YTeX: PDF 画像挿入時に `/Rotate` がサポートされるようになりました。出力ドライバが正常終了しなかった際の終了ステータスが非ゼロ値になりました。UTF-8 やプリミティブ周りのさまざまな不具合が修正されました。

MacTeX: 下記のサポート macOS バージョン変更を確認してください。加えて、MacTeX によって `/Applications/TeX/` 以下にインストールされていたファイルが整理されました。今後このディレクトリ直下には GUI プログラム (BibDesk, LaTeXiT, TeX Live Utility, TeXShop) が置かれ、サブディレクトリに追加のユーティリティやドキュメントが配置されます。

tlmgr: 新しいフロントエンド `tlshell` (Tcl/Tk) と `tlcockpit` (Java) が追加されました。それに伴い、`tlmgr` が JSON 出力に対応しました。 `uninstall` コマンドは `remove` の別名になりました。新しいアクションおよび同名オプションとして `print-platform-info` が追加されました。

プラットフォーム：

- `armel-linux` と `powerpc-linux` は削除されました。
- `x86_64-darwin` のサポート対象は macOS 10.10–10.13 (Yosemite, El Capitan, Sierra, High Sierra) になりました。
- `x86_64-darwinlegacy` のサポート対象は 10.6–10.10 です (10.10 については `x86_64-darwin` の利用をおすすめします)。 `powerpc-darwin` と `i386-darwin` が削除されたことによって、10.5 (Leopard) のサポートは完全的に終了しました。
- Windows XP はもはやサポートされません。

9.2 現在：2019

Kpathsea: ブレース展開とパス分割の一貫性が高まりました。設定ファイルでは‘.’をハードコードする代わりに新しい変数 `TEXMFDOTDIR` を使用することになりました。これは、追加のディレクトリやサブディレクトリの検索を容易にするためです（詳細は `texmf.cnf` 内のコメントを参照してください）。

ϵ -pTeX, ϵ -upTeX: 新プリミティブ `\readpapersizespecial` と `\expanded` が追加されました。

LuaTeX: Lua のバージョンが新しい算術演算とインターフェースの変更を含む 5.3 に上がりました。PDF 読み込みに独自ライブラリ `ppplib` が用いられるようになったので、`poppler` への依存がなくなりました（同時に C++ にも依存しなくなりました）。これに伴い Lua インターフェースも変更になっています。

METAPOST: 常に `--restricted` が有効となる `r-mpost` コマンドが導入され、同コマンドはデフォルトで制限リストに追加されるようになりました。デシマル・バイナリモードにおける最小精度は 2 になりました。バイナリモードは `MPLib` ではサポートされなくなりましたが、スタンドアロンな `METAPOST` では今でも利用可能です。

pdfTeX: 新プリミティブ `\expanded` が追加されました。新しいパラメタ `\pdfomitcharset` が 1 に設定されている場合、`/CharSet` は PDF 出力で省略されるようになりました。これはその値が PDF/A-2 および PDF/A-3 の仕様を満たすことを保証できないためです。

X_YTeX: 新プリミティブ `\expanded`, `\creationdate`, `\elapsedtime`, `\filedump`, `\filemoddate`, `\filesize`, `\resettimer`, `\normaldeviate`, `\uniformdeviate`, `\randomseed` が追加されました。また `\Ucharcat` はアクティブ文字を生成できるように拡張されました。

tlmgr: ダウンロード用ツール `curl` をサポートしました。ローカルバックアップの際に（利用可能であれば）`lz4` と `gzip` を `xz` を適用する前に使用するようになりました。環境変数 `TEXLIVE_PREFER_OWN` が設定されていない限り、圧縮およびダウンロード用に用いるプログラムについては TeX Live が同梱するものよりもシステムに用意されているものを優先して使用するようになりました。

`install-tl`: macOS および Windows では新オプション `-gui`（引数なし）がデフォルトになりました。この状態では新しい Tcl/Tk GUI が起動されます（詳細は 1.3 節, 3.1.6 節を参照してください）。

ユーティリティ：

- `cwebbin` (<https://ctan.org/pkg/cwebbin>) が TeX Live における CWEB 実装となりました。この実装ではより多くの言語がサポートされ、簡易な索引を作成する `ctwill` プログラムが追加されます。
- `chkdvifont`: DVI ファイルや `tfm/ofm`, `vf`, `gf`, `pk` からフォント情報を抽出して報告します。
- `dvispc`: スペシャルを考慮して、DVI をページ独立にします。

MacTeX: x86_64-darwin のサポート対象は 10.12 以上 (Sierra, High Sierra, Mojave) になりました。x86_64-darwinlegacy は引き続き 10.6 以降をサポートします。スペルチェッカ `Excalibur` はもはや同梱されません（32-bit サポートが必要なためです）。

プラットフォーム：sparc-solaris は削除されました。

9.3 未来

TeX Live は完璧ではなく、これからも成長し続けます。私たちはこれからも新しいバージョンのリリースを続けるつもりで、より多くのドキュメントとプログラムを提供し、これまで以上に良質で品質の保証されたマクロ、フォント、その他 TeX に関連するあらゆる成果物を含むツリーを作っていくつもりです。こうした仕事はすべてボランティアが余暇を使用して行っており、そのために常にやるべきことが残っています。ぜひ <https://tug.org/texlive/contribute.html> を読んで、コントリビューションを検討してください。

間違いの指摘や提案、ヘルプの要望は以下に送ってください（英語）：

tex-live@tug.org
<https://tug.org/texlive>

Happy TeXing!